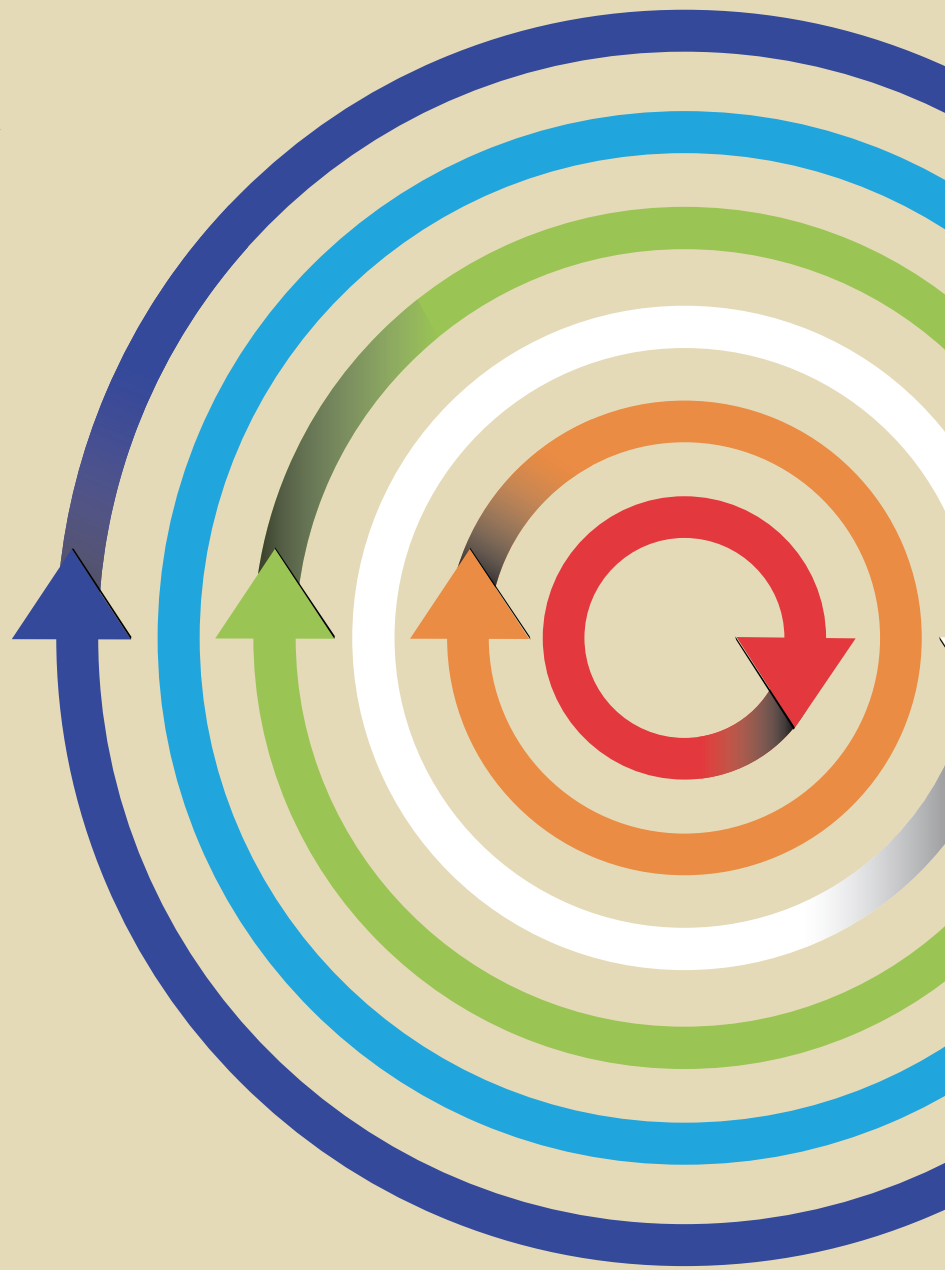
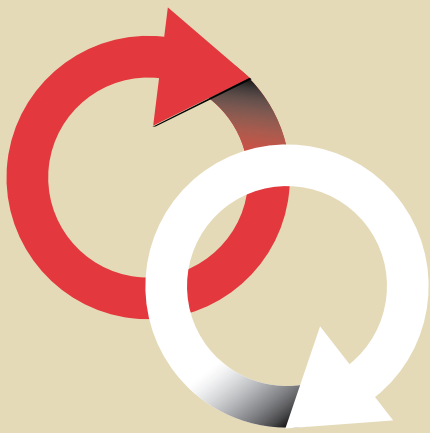




# ジュニアスポーツの 育成と安全・安心 フォーラム



平成 27 年度  
講演録

# 宣言しよう、フェアプレイ。

宣言しよう。  
全力をつくし、挑戦し、  
楽しむことを。

宣言しよう。  
仲間を信じ、思いやることを。

宣言しよう。  
約束を守り、応援してくれる人への  
感謝を忘れないことを。

その誓いは、スポーツを  
もっと楽しいものにしてくれる。  
日々の生活を  
もっとすがすがしいものにしてくれる。

そして多くの人々を活気づけ、  
今の日本を元気にするチカラにも  
なってくれる。

さあ、あなたも手を胸に。  
フェアプレイの誓いを。

フェアプレイで  
日本を元気に

あくしゅ、あいさつ、ありがとう



「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンで、  
フェアプレイの輪を広げ、日本をもっと元気に!

あなたもはじめの一步を、まずはホームページで。

[フェアプレイ宣言](#)

[検索](#)



日本体育協会は、スポーツ立国の実現のため、国民体育大会をはじめとする各種スポーツ大会の実施やスポーツ指導者の育成等を行うとともに、スポーツの持つ価値や意義を広くアピールし、国民の生きる力の育成と活力ある社会の構築に貢献していきます。また、日本をもっと元気にしたい。その想いから、「フェアプレイ宣言」推進の取り組みも行っています。



公益財団法人

日本体育協会

わたしたちは、「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンを応援しています。

asics

大塚製薬

mizuno

三井住友海上  
MS&AD INSURANCE GROUP

LAWSON

LOTTE

SUNTORY

KOSAIDO



平成 27 年度

# ジュニアスポーツの育成と 安全・安心フォーラム

## ■講演録目次

主催者挨拶	望月浩一郎(日本スポーツ少年団常任委員) .....	2
主旨説明	白井 久明(日本スポーツ法学会副会長).....	3
開催要項	.....	4
日程表	.....	5
●基調講演	.....	6
<b>セッター思考 人と人をつなぐ技術を磨く</b>		
演 者：竹下 佳江(元全日本女子バレーボール代表・主将)		
聞き手：亀井 希生(毎日放送アナウンサー)		
●パネルディスカッション	.....	21
<b>2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に 今後のスポーツによる青少年の健全育成について考える</b>		
座 長： 宮嶋 泰子(テレビ朝日スポーツ局)		
パネリスト： 荒木 香織(兵庫県立大学環境人間学部)		
佐々木玲子(慶應義塾大学 体育研究所)		
佐藤 充宏(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)		
閉会挨拶	関 美知夫(公益財団法人スポーツ安全協会常務理事) .....	41

## 主催者挨拶

日本スポーツ少年団常任委員

望月 浩一郎



皆さんおはようございます。ジュニアスポーツの育成と安全・安心フォーラムを開催するにあたり、主催者を代表してひと言ご挨拶を申し上げます。

本日はスポーツ少年団関係者の皆さま、スポーツ安全協会関係者の皆さま、弁護士の方々など、ご多用にもかかわらず多数のご参加をいただき、誠にありがとうございます。

本フォーラムは公益財団法人スポーツ安全協会、日本スポーツ法学会の協力を得、ジュニアスポーツの安全面に焦点を当て開催していますが、毎年多くの示唆に富んだご提言をいただき、多くの成果を上げておりますことは主催者として嬉しい限りでございます。

近年、子どもたちの事故が多くなりました。これまでも増してさまざまな危険やストレスが子どもたちにもたらされています。このような状況下において、地域の中で活動するスポーツ少年団にとって、子ども

たちが安全に安心して活動するための環境づくりは非常に重要な課題となっております。

本日は、心理学、社会学、運動生理学などの観点から議論を深め、私たちの活動環境を再確認するとともに、今後さらなる安全・安心対策を講じるためのきっかけにしたいだけばと願っております。

ご参加の皆さまには、本日のフォーラムで得た知識を現場で活用いただき、子どもたちが安全で安心して活動できる環境整備に、従前にも増してご協力をいただきますようお願い申し上げます。

結びとなりますが、共催をいただきました公益財団法人スポーツ安全協会、日本スポーツ法学会、またご協賛をいただきました各保険会社、そしてスポーツ少年団協力弁護士の方々の皆さまのお力添えに重ねて深く感謝を申し上げます、開会のご挨拶といたします。ありがとうございました。



## 開催主旨説明

日本スポーツ法学会副会長

白井 久明

おはようございます。本日のフォーラムの主旨説明をさせていただきます。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会まであと5年となりました。その中でスポーツに関心が高まり、幼少期からスポーツに触れたり、特定のスポーツに専門的に取り組む流れが出てきています。スポーツ少年団としてもそうしたニーズに応えられるように環境を整え、活動を充実させていく必要があるかと考えています。

本日の基調講演では、元全日本女子バレーボール代表・主将の竹下佳江様に「セッター思考 人と人をつなぐ技術を磨く」をテーマに講演していただきます。今回は毎日放送の亀井希生様に聞き手として、お話をさせていただく形式で行います。午後のフォーラムでは、テレビ朝日スポーツ局の宮嶋泰子様を座長に、兵庫県立大学の荒木香織准教授、慶應義塾大学の佐々木玲子教授、徳島大学の佐藤充宏教授をパネリストに迎え、「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に今後のスポーツによる青少年の健全育成について考える」をテーマとしたお話をさせていただく予定です。

スポーツ少年団は、子どもたちが安全で安心できる環境のもとにスポーツに取り組

み、楽しむことを目的として活動しております。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを契機として、さらにその50年後の2070年を見据え、スポーツ少年団がこれから何をしなければならぬかを考え、子どもたちのスポーツ環境を整えていく必要があるかと考えております。本日のフォーラムにおいては会場の皆さま方と一緒に考え、よりよいスポーツ少年団活動を支えていきたいと思っております。

少し話が異なりますが、スポーツ法学会の有志により昨年、一般社団法人日本スポーツ法支援・研究センターを設立し、スポーツ法に関する各種サービスを提供する体制を整えました。日本体育協会からも「スポーツにおける暴力行為等相談窓口」の運営を受託し、活動を始めております。また同センターは日本体育協会の受託窓口とは別に、スポーツ法にかかわる一般相談も受ける体制も整えています。スポーツにかかわるお困り事や悩み事等は、こちらにもご相談いただければと思っております。インターネットで日本スポーツ法支援・研究センターと検索していただければ連絡先が出てきますので、そちらにご連絡ください。

以上のような議題で本日進めてまいりたいと思っております。よろしく願いたします。

# 開催要項

1. 主 旨 社会情勢の変化により、子どもたちが犠牲となる痛ましい事件が数多く聞かれるようになってきた昨今、スポーツ活動の現場及びその周辺においても、子どもたちの安全を確保し、安全にそして安心してスポーツに取り組み、楽しむことが出来る環境を整えることが急務となっている。  
本フォーラムは、ジュニアスポーツの育成に欠かすことのできない安全・安心対策について、法学・教育学・心理学・医学などの見地から問題点を明らかにし、議論することにより、問題解決の方策を探ることを目的に開催する。
2. 主 催 公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団  
公益財団法人スポーツ安全協会  
日本スポーツ法学会
3. 後 援 文部科学省
4. 協 賛 スポーツ安全保険引受損害保険会社  
(東京海上日動火災保険株式会社 他7社)
5. 期 日 平成27年12月6日(日)
6. 会 場 ナレッジキャピタル・カンファレンスルーム・タワーC  
〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町3-1  
グランフロント大阪・北館タワー C8階 TEL:06-6372-6417
7. 内 容 \*基調講演「セッター思考 人と人をつなぐ技術を磨く」  
\*パネルディスカッション  
「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に  
今後のスポーツによる青少年の健全育成について考える」  
\*ジュニアスポーツ法律アドバイザー研究会(弁護士対象)
8. 参加対象者 スポーツ少年団登録指導者・役職員  
ジュニアスポーツに従事する弁護士など法律実務家および学者  
スポーツ安全協会関係者  
スポーツ安全保険引受損害保険会社関係者
9. 申込方法 所定の参加申込書により平成27年11月20日(金)までに日本スポーツ少年団宛申し込むこと。
10. 定 員 180名
11. その他 本フォーラムは、公益財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者の資格更新のための義務研修となります。ただし、水泳、サッカー、テニス、バドミントン、剣道、山岳、空手道、バウンドテニス、エアロビック(上級コーチのみ)、スクーバ・ダイビング、スポーツドクター、スポーツデンティスト、アスレティックトレーナー、スポーツ栄養士、クラブマネジャー、プロゴルフ(教師・上級教師)、プロテニス、職業スキーマの資格者については、別に定められた条件を満たさなければ資格を更新できません。テニスの指導者は2ポイントの実績になります。(平成27年4月1日現在)

# 日 程

期日／平成 27 年 12 月 6 日(日)

会場／ナレッジキャピタル・カンファレンスルーム・タワー C  
(グランフロント大阪・北館タワー C8 階)

◎司会進行 入澤 充(国土舘大学法学部法律学科教授)

10:45 **【開会式】**

主催者挨拶：望月浩一郎(日本スポーツ少年団常任委員)

主旨説明：白井 久明(日本スポーツ法学会副会長)

11:00 **【基調講演】**

テーマ：「セッター思考 人と人をつなぐ技術を磨く」

演 者：竹下 佳江(元全日本女子バレーボール代表・主将)

聞き手：亀井 希生(毎日放送アナウンサー)

12:30 休憩(昼食)

ジュニアスポーツ法律アドバイザー研究会(※弁護士対象)

13:30 **【パネルディスカッション】**

テ ー マ：「2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に  
今後のスポーツによる青少年の健全育成について考える」

座 長：宮嶋 泰子(テレビ朝日スポーツ局)

パネリスト：荒木 香織(兵庫県立大学環境人間学部)

佐々木玲子(慶應義塾大学 体育研究所)

佐藤 充宏(徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部)

15:30 **【閉会式】**

閉会挨拶：関 美知夫(公益財団法人スポーツ安全協会常務理事)

基調講演

# セッター思考

——人と人をつなぐ技術を磨く

—— ことしは、竹下さんにとって  
どんな一年でしたか。

竹下 5月に出産してからは、子どもと毎日向き合いながらも主人はアスリートということもあり、基本は広島で主婦をしています。

—— 出産というのは大変ですか。  
竹下 今日男性の方がたくさんいらつしゃるので(笑)、よくプレーヤーとしてやってきたときと、どちらが大変かと聞かれることが多いのですが、全く別物ですね。

—— 子育てをしながら日本バレーボール協会の理事としてさまざまな活動をされている竹下さん。フェイスブックを拝見すると先日東北のほうで子どもたちと触れ合いながら普及活動に参加されています。

竹下 現役時代はやはり代表になると一年中休みなくやっている状況なので、子どもたちと触れ合うバレー教室はできなかつたのですが、いまは子どもたちにバレーボールの楽しさを感じてもらおうということ

で、遠くの現場でも足を運んでいます。

—— そんな大忙しの2015年でしたが、6月の29日にPHP新書から本を出されました(図1)『セッター思考 人と人をつなぐ技術を磨く』ということですが、これは竹下さんがセッターのポジションを長年続けてこられて、その中で身につけたり考えたものなどが詰まっているということでしょうか。

竹下 私は小学校5年生からセッターを始めて、もともとバレー生活の中でセッターでずっと育っています。本当にいろいろなことを経験させてもらった中で、生活する中でもリーダーとしてもそうですが、何かきっかけになることがあればいいなと思いつつ、この本を書かせていただきました。

—— 簡単に言うとバレーボールの中で、アタッカー、スパイクを打つ人がいて、トスを上げる人セッターがいて、もう一つ専門のポジションでリベロというポジションがありま

元全日本女子バレーボール代表・主将

え 江 佳  
よし 竹下  
お 希  
まれ 亀井  
かめ

(聞き手) 毎日放送アナウンサー

東日本大震災復興支援「とどけよう スポーツの力を東北へ!」  
平成27年度ジュニアスポーツの育成と安全・安心フォーラム

主催 公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団 公益財団法人スポーツ安全協会 日本スポーツ法学会

セッター思考  
人と人をつなぐ技術を磨く

演 者：竹下 佳江さん  
(元全日本女子バレーボール代表・主将)

聞き手：亀井 希生さん  
(毎日放送アナウンサー)







図1

す。そんなさまざまなポジションの中でコートの中に普通は一人しかいないセッターという人の役割、考え方のようなものがひよっとすると皆さまの実生活の中でもお役に立てるのではないかと。

竹下 37歳の若造がと言われたらそれまで（笑）なのですが、バレーボールで自分が経験しているいろいろな感覚が伝わって何か伝わる感覚があればいいなと思いつつ書かせていただきました。

——私も拝読しましたが、非常にビジネスにも役に立つ本だなと感じました。部下を管理する、あるいは上と下をつなぐという意味では大変に役に立つ思考が、このセッター思考という考え方ではないかと思えます。この『セッター思考』という言葉がキーワードにお話をいただければと思います。よろしくお願ひします。

## セッターというポジションの出会い

—— それでは本題です。まず竹下さんの選手としての歩みを振り返ります。

プロフィールの紹介の際に小学3年生のとき（バレーボールを始めた時期）と申し上げましたが、具体的には3つ上のお姉さんが大きなきっかけだったそうです。

竹下 はい、3つ上の姉がバレーをしていて、そのお迎えに行っているときに、当時の監督さんからちょっとボール拾いしながら入部してみたいなかと誘われ、それがきっかけでバレーを始めました。

—— 本にも書いてありますが、いろいろなものやってみたくれどもバレーに関してはもうスツと入っていったというか、「これ好きだな」と思われたとか。

竹下 そうですね。次女なので姉について回って遊んだり、姉がやっていることをやりたいということ、常に姉を追っかけていましたね。

—— お姉ちゃんができることだったら私もやりたいと。  
竹下 その当時姉もすごく上手なプレーヤーだったので、その姉を見ていて、こんなふうになりたいなとか、そういうところがスタートラインでした。

—— 実際に地元のチームを指導している方はきつとそういう場面にあることあるかと思いますが、周りに目を配って、ちょっと下の子にも声かけをしてあげるといのがすごい出会いになる可能性もあるわけですね。

竹下 本当にいいきっかけをいただいたなと思います。私にバレーが合っていたかどうかといえば、当時は監督はわかっているとは思いますが、そういうひとつのスポーツでの出会いから広がっていくというのはすごくいいきっかけをいただいたなと思っています。

—— セッターというポジションとの出会いはいかがでしたか。  
竹下 小学校3年生からバレーを始めて、最初はレシーバーというポジションでしたが、そのときは9人制のプレーでした。その後小学校5年生から6人制に変更されて、そこからセッターを始めることになりました。

—— スパイクを打つのではなくて、ボールを上げてあげるポジションということですが、最初から面白かったのか、あるいはお前やれと（笑）言われたのかどちらでしたか。  
竹下 あなたはこのポジションやりにさいということ、セッターをすることにしました。バレーボールの花形というのはアタッカーで、点を取ってヒロインになるということにやはり憧れるところではあるのですが、当時はセッターをやり

なさいということ、やるかみたいな感じからのスタートでした。

—— そして高校に進学されますと、いよいよバレーに本格的に打ち込むということになります。不知火女子高等学校、当時の木屋（和成）監督に強く請われて、がんばってみたいということになったとお聞きしています。

竹下 はい。当時どこの高校に行こうかと悩んでいたときに、恩師の木屋先生という方が、僕と一緒にみんなと全国制覇をしようじゃないかという大きな夢を私に届けてくれて、やはり自分もやるからにはトップを目指してがんばりたいという思いで、その高校に決めました。

—— この不知火女子高校では全寮制。寮に入っている3年間、女子校の寮で、それもバレーボール漬けの生活はどんなものでしたか。  
竹下 寮が学校から離れているのであれば、またちょっと気持ち的にも抜けるかなと思いますが、学校の敷地内に寮があったので、常に気が張っていました。

—— 他のクラスメイトは当然いろいろな遊びに行ったりして、羨ましいなとか、バレー辞めてやるううというふうには思われなかった。  
竹下 高校のときは、本当に自分で決めた道だから絶対に逃げないと思って入っていたので。なかには



苦しくて逃げ出す子もいましたけど、私は絶対に、親の反対もあるなかで高校を決めたので、絶対逃げないということで毎日毎日がんばっていました。

——それは親御さんが他の学校のほうがいいとお考えだったのでしょうか。

竹下 はい。私は北九州の出身で地元の高校に行つてほしいという両親の思いがありました。親元を離れて大牟田市の高校を選んだのです。

——がんばって打ち込んだ成果が出ます。キャプテンを任せられて、高校3年生のときには世界ユース女子バレーボール選手権で金メダルを獲得されました。もう既にこの

ときに世界の強さや、レベルのようなものを少し感じたわけですね。

竹下 この世界ユースは高校生のトップの選手が集まって世界と戦う大会でした。何故159cmの選手がここに選ばれたかというところから始めると、当時私の1つ下の強化選手で身長が大きくて素晴らしい子がいたのですが、その子がたまたまケガをしていて、私はどうだと木屋先生が選抜の先生に話されて、それがきっかけでその選抜に入ることになったので、チャンスももらつてそこに立つことができたのは本当に大きかったなと思います。

### 実業団から日本代表へ そして挫折

——そして高校を卒業されて、社会人実業団のNECレッドロケッツに入団されました。最初からスターでレギュラーでというわけではなくて、レギュラーのポジションを掴んだのは4年目だったとか。

竹下 最初は9人制のチームに私は決まっていきましたが、ぎりぎりNECのほうに入部しないかというお話をいただいて、そのときの話もしかししたらあなたはずっとユニフォームを着られないかも知れないですよ、コートにも立てないかも知れないですよ、でもチームとしてあ

なたは必要なのでどうですかというお話からスタートしたのです。

——それでもやってみようかと。竹下 何故やる前からそういうことを言うのかなという思いもありました。やってみなければわからないのではという部分もありましたし、ただバレーボールは身長の高い選手が有利なスポーツなので、この身長がネックになるのかなと悩んだ時期もありました。

——しかし、練習を重ねてレギュラーを掴んでからは大躍進。1999〜2000年のシーズンは確かレッドロケッツは21連勝、ぶっちぎりの優勝でした。

竹下 そうですね。全勝優勝しました。

——さらには日本代表にも選ばれます。2000年のシドニーオリンピック世界最終予選ということになります。このときには残念ながらクロアチアに敗れて予選敗退。1964年の東京オリンピックから続いていた女子のバレーボール日本代表オリンピック連続出場が途絶えてしまうということがありました。このときは忘れようと思つても忘れられないと思えます。

竹下 本当にNECで全勝優勝した次の年のシーズンで、自分自身も勢いもあり、日本のためにオリ

ピックに絶対出るんだという強い思いで臨みましたが、結果として初めてオリンピックに行けないという経験を、すごく苦しんだ時期ではあります。

——オリンピックといえば、他の競技大会にも増して注目が集まります。マスコミも含めていろいろな選手、あるいは指導者にバッシングのようなことまで起こり、大変にしろ竹下さんはセッターというポジションで、ご自身も責任感の強い方ですので、そこも含めていろいろ背負つて悩まれた。で、2002年の春、一度バレーボール競技の世界から離れてNECを退団された。このときはもう一度リセットしたいという決断だったのでしょうか。

竹下 本当に心とからだがいこころにならないうか団体競技をやる以上周りに迷惑をかけるということもあり、とにかく一度バレーの世界から身を引こうという思いでした。

——地元に戻り、ハローワークにも顔を出して、お仕事を探したことも。おばあちゃん子だったので介護の仕事が向いているのではないかと検索したり…

竹下 はい、そうです。いまはバレーボールも移籍ができるように



次に進めたのかなといまは思いません。

—— 高校の木屋先生との出会いもそうですが、そういった方々の強い言葉が本当に人を動かすことがあるんだな、残っていくんだなど。

そしてJT時代になると、セッターというポジションへの向き合い方も変わってきます。本当の面白さを感じるようになっていた。自分が大きくなるよりも、チームが大きくなるほうが嬉しい。この『セッター思考』のなかから抜粋をさせていただきますました。具体的にはどういったことでしょうか。

竹下 セッターはワン・ツー・スリーの真ん中で2本目を上げられるポジションです。試合を左右するといわれる、監督の頭脳ともいわれるポジションなので、やはり自分が輝くよりもみんなが輝いたほうが、試合も勝てるし、1本を決めたときのみんなの笑顔を見ているだけで自分も幸せになれるという思いが強くなってきました。

—— ただ、4月に退かれて、その年の8月にJTマーベラスからお声がかかりました。当時の杉原(香二)部長、そして一柳(昇)監督が大変熱心に誘われたとうかがっています。

竹下 自分のなかでは、もう辞めたという事はバレー界には戻れないという強い思いがあったのですが、熱心な思いを込めてあなたはこの世界に絶対必要な選手なんだとおっしゃっていたので、自分のなかの心の扉がそこでパッと開いて

ムのかなでやらなければいけないこともありましたし、JTというチームに変わって、監督も変わりますし、人との関係性も変わってくるので、じゃあどういふふうにならなくていいかなと、どんどん、どんどん変わっていききました。

—— 全日本で柳本(晶一)監督に招集をされました。アテネオリンピックベスト8、そして5位。さらには北京オリンピックでも5位。キャプテンも務められました。アテネと北京5位で同じですが、ご自分のなかではこの5位の重み、手応えがちよつと変わったとか。

竹下 アテネのときはシドニーの後で、どうしてもオリンピックに出ないといけないという強い思いのなかで、オリンピック最終予選を戦って、やつとオリンピックの切符を掴み臨みました。そのときは本当にオリンピックに出られてよかったという思いのほうが強かったように思います。その後北京のときは、自分がキャプテンになり、チームも若返り、いろいろな経験をしながら、少しずつ自分自身が成長したところもありませんし、プレーヤーとしてもみんなが年々上手くなっていて、世界との戦い方というところではアテネのときとはちよつと変わってきたのかなと

思います。

—— 私共マスコミの報道などですと、ついついでに5位で同じだと書いたりしゃべったりしがちですけども。同じ成績でも、その中味、充実に度にはプレーヤーあるいはチームによっては大きく違いがあるということだと思えます。そして真鍋政義監督の全日本では、世界選手権で2010年銅メダル、32年ぶり。さらにはワールドカップ4位、2012年のロンドンオリンピック銅メダルとつながって行きます。本のなかにもありますが、ロンドンオリンピックのときの全日本は、本当にいい群れになっていて、データバレーでみんなのレベルも上がっていました。この「いい群れ」ということ、どういうことでしょうか。

竹下 女性は結構一人で行動することが少なく、悪いほうに群れがちなのですが、ロンドンのときには本当に目標設定もしっかりしていたし、それぞれ個性もあって、いろいろなキャラクターがいましたけど、目標設定があるだけにすごくいい群れになって、いい方向に進めたと思っています。

### 30分タイプコメント

—— では具体的に今日のキーワードである『セッター思考』について考

### セッター思考の芽生え

—— その頃から少しずつセッターとしての思考のようなものが具体的な形を取り始めてきたのかも知れません。ご自分のなかで。

竹下 そうですね、NECのチー

えたいと思います。バレーボールには3つのポジションがあります(図2)。まずアタッカー。人をグイグイと引っ張っていくような行動力のあるタイプ。いまの全日本でいうと、たとえば木村沙織選手ですとか、竹下さんの現役の頃ですとか、高橋みゆきさんのようなアタッカーがいますが、やはりご自分とは全然違うタイプですか。

竹下 アタッカーをしていても、性格的にセッターぽいと思わせる子もいます。高橋みゆきさんや吉原知子さん、大林素子さんはアタッカー型です。

——そして、リベロ型。守備専門のポジション。基本的にはレシーブのみで、まず最初にボールが自分たちのコートに返ってきたときに返す大切なポジション。プレミアリー

グを見ると、ユニフォームのカラーリングがちょっと違っていたりすることもありますが、受け身だけでなく与えられた役割をしっかりこなす職人タイプ。割とそういう方が多いのですか。

竹下 そうでもありません、これが。佐野(優子)選手というロンドンで一緒に戦った彼女はリベロ型ですね。本当にきっちり仕事をこなして職人型のタイプです。いまリベロといいますが、代表のほうは年々いろいろ変わりますが、やはり派手なプレーヤーもいます。自分が派手にプレーをして目立ちたいというような選手もリベロではいませんね。そういった子はアタッカー型です。

——ただ自分に与えられたポジションできっちり仕事をするんだという責任感、その資質という点では、共通しているところがある。

竹下 そうです。

—— さあそして、セッター型です。人と人をつなぐ黒子のようなタイプ。チームのみんなの活躍を支える縁の下の力持ち。黒子でありながらゲームをコントロールする司令塔でもある。攻撃が始まる、スパイクが決まる、パツとTVカメラが映し出すのは当然アタッカーです。でもそのアタッカーがい

のいいトスがある、そこには作戦があるわけですよ。

竹下 はい。

—— 具体的にトスを上げるといのは、どの選手に上げるかという選択肢はある程度セッターに任されていると思いますか。

竹下 そうです。その選択肢はセッターに全部任せられています。

—— 監督さんやコーチから当然指示とか、おおまかな方針は出ているかと思いますが、実際にコートなかでの瞬間瞬間のプレーで判断したり、次はこのプレーで行くよとサインを出しているのはセッター？

竹下 はい、セッターです。サインも全部セッターが組み立て、そこをコントロールしないとイケないということもありますし、監督はミーティングでも戦術をセッターに伝えますし、流れで全くゲームメイクも変わってくるので、そこでまた指示が飛んできたりとか、変化するので常に頭をフル回転させていないと駄目なポジションですね。

—— 野球でもキャッチャーは現場で配球を考えます。サツカーですとボランチとかあるいは10番がパスを配球する役割を担うことが多い。ラグビーですとスクラムハーフ、スタンドオフといったポジションでしょうか。そういったポジションは比較的スポットライトがあたるので

すが、セッターというのは非常に黒子的な部分が多いように思います。セッターだけをものすごく映すというバレーボールのテレビ中継もあまり無いと思います。そこで、こっちも見てよとか、いまのは私のパスが良かったからとか。そういうふうには思いませんか？

竹下 思わないですね。でも若い頃は自分が注目されたいという思いもありましたけど。だんだん、そうではない面白さに気づき始めます。

—— いやらしいことを聞くようですが、人間ってやはり褒めてもらいたい動物だし、評価もされたい。どいういう人にどんな褒め方をされるとセッター冥利に尽きるということはありませんか。

竹下 あなただすごいねとか、今日の試合よかったよと言われるよりも、苦しい試合のなかで監督に、もうこの試合お前に任せたと云われたときに、よかったなと思えますね。

—— 結果が出るよりもそのプロセス。途中で、もうお前がセッターなんだから、お前に全部任せたと云っててよかったという感じですか。

竹下 やはり結果だけではなくてその過程を大事にしていたんだなと思います。

### 3つのタイプについて

「セッター思考」より

#### アタッカー型

人をグイグイ引っ張っていくような行動力のあるタイプ  
例) カリスマ経営者・監督、No.1営業マン、団体競技のエース

#### セッター型

人と人をつなぐ黒子(くろこ)のようなタイプ  
チームのみんなの活躍を支える縁の下の力持ちのような存在  
黒子でありながら、ゲームをコントロールする司令塔

#### リベロ型

※「リベロ」守備専門のポジション。基本的にはレシーブのみ。セッターにつなぐ大事なポジション  
受身だけでなく、与えられた役割をしっかりとこなす  
職人タイプ

図2

## チームはセッター思考で輝く

——そして、チームはセッター思考で輝くということ。オリピックをはじめ女性が活躍する時代になつていますが、このセッター思考というのが女性が活躍する時代にとっては特に大切だということ。具体的には全日本の監督の眞鍋さん。眞鍋さんも女子を率いるリーダーではありますが、ご自身もセッターとして長年プレーをされてきた方です。

竹下 セッター出身の監督であつても自分が自分という方はいらつしゃつたし、そういうなかでは眞鍋監督はセッター出身でセッターらしい監督だなと思います。非常に細かいですし、女性のちよつとした変化も見逃がさないし、一人ひとりのコミュニケーションの取り方は私自身もすごく勉強になりました。

—— チーム全体、コート全体を見るセッターとしての経験が指導者としても活かされていたのではないかといいことですよ。その眞鍋さんが冗談だと思ひますがおっしゃったのが、「女子は面倒くさいわ、大変や」と書いてあります。そうなんですか？ 怒鳴りつけると内心ムツとする。叱るべき場面で叱らないと好き勝手し放題。リーダーシッ

プを發揮しすぎても依存。自主性に任せたら立ち止まる。どないしたらええんですかという話なんですけれども。

まず「怒鳴りつけたら内心ムツとする」ですが、男子の場合ですと「こら、お前何やとるんじゃ！」「すんません」で済む。女性はそうではないのですか。

竹下 そうですね。何かしら内心思っていることが顔に出たりとか、やはり何でそんな怒鳴られないといけないの？というところから始まつたりとか。

—— 大先輩の東洋の魔女の皆さんが当時の鬼監督にものごくしごかれても、選手たちだけのミーティングになると「何よ監督、私たちのこと何だと思つてるのよ」みたいなこと言つてたとか。年中不服が入つてるとよくないですけど、内心でそこにわだかまりが残る場合もあるということですね。

竹下 あります。

—— ただし、叱るべき場面で叱らないと好き勝手し放題になる。とありますが……

竹下 よく眞鍋監督は放し飼いにしたら、代表は動物園のようだとおっしゃつていました。好き放題するのと。

—— 指導者がリーダーシップを發揮しすぎても依存してしまふ。あ

まり懇切丁寧に手取り足取りやつても駄目だということでしょうか。

竹下 いまは自分も小学生と向き合うことがよくありますが、全て答えを出してしまうと、相手は考えることから逃げてしまうと思ひます。だから考えろということ。テーマに、監督もちよつと近づいたり離れたりすることが必要ではないのかなと思ひます。

—— 自分の考えを持って自主性を持つてやつてほしいと監督さん、コーチの皆さんは思つてわけですが、任せすぎると立ち止まる。これは、どうということですか。

竹下 監督が思い描くバレーというものもあるし、そこに行くまでにちよつとある程度答えを少しあげないと、これが正しいのか、これは不正解なのかというところで、迷つてしまふというところはあると思ひます。

—— 丸投げでも駄目。適度な感でヒントのようなものを与えてあげるということですか。

竹下 何でこれ、男性はわかつてくれないんだろうとか。監督全然見えないとか。そういうことを結構選手は言ひます。でも、眞鍋監督は聞く耳を持つてくれる。どんだん上に立つて行くと人の言葉が耳に入つてこなかつたりとか、シャットアウトしたりということが

結構あるような気がしますが、眞鍋監督はどんなに若い20代の選手でも、ちゃんと会話をしてくれる。そこから選手との信頼関係も出てくるのだと感じます。

—— 自分のわからないことはわからないとして聞いてあげる。謙虚に質問をするといったことが女性とコミュニケーションをとる方策の1つではないかなと思ひます。で、そういった面倒くさいことをたくさんクリアできると、素直で我慢強いという、日本の女性のストロングポイントにつなげてくれるわけですね。

竹下 本当にこれだけスタッフががんばつてくれているとか、そういうつながりでもともと持っている我慢強さというのがさらに強くなつてくると思ひます。

## 女性は「群れ」をつくりたがる

—— 男子のバレーも迫力があつて大好きですが、女子のバレーのひとつの魅力は打ち込まれても打ち込まれてもがんばつてつなぎ続けるところ。あの粘りはやつぱり女子ならではと思ひます。サッカーのなでしこジャパン、ワールドカップでも優勝しました。そのときでも日本の女の子は何でこんなに骨惜しみせずに走れるんだ、最後の最後ま

でがんばり抜けるんだというその理由は、一体化したとき、そしてチームのためにと思ったときの素直さ我慢強さがスポーツの世界で発揮されるということでしょうか。

そして、女性チームはセッター思考で輝くということですが、さきほど出ました群れを作りたがること(図3)。男でも政治の世界では派閥というものがありませんが、この女の子の群れというのは少し違う。自然と2〜3人あるいは3〜4人の小グループに分かれてくる。大事なものはその小さな群れの中心人物を見つけて、群れ毎の中心人物にサブリーダー的なポジションを割り振るといっていいですか。

竹下 そうですね。それぞれ個性も違いますし、性格も考えていることも違いますし、あっちのグループ

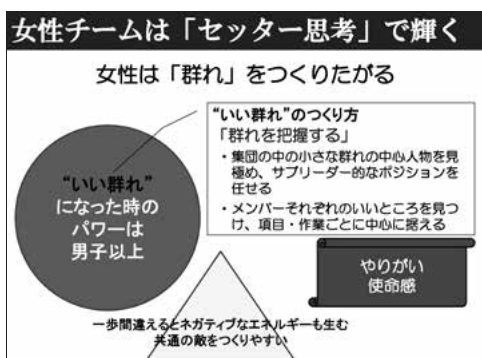


図3

プはとかいろいろあることがあるとは思いますが、チームとしての方向性をしっかりしておけば、群れの一人をつかまえて、こうやって行こうということ伝えていけば上手くチームとして成り立っていきます。

竹下さんがキャプテンを務めていた頃の全日本でいいますと、中堅の選手は大友愛さんに任せて、若手のまとめは木村沙織選手をお願いするといった使い分けをされていた。さらにはプレーだけじゃなくて、掃除ならあなた、イベントの司会はあなたといったように、それぞれのいいところを見つけて、項目・作業毎に中心に据えてあげる。これも大事ということですね。

竹下 プレーが上手ければいいという問題ではなく、チームはやはりバランスだと思うので、それぞれに特徴があり、いいところがあり悪いところがあります。そういったなかで役割分担を利用することによって、チームとしてのバランスも良くなっていきます。

男の場合ですと、やっつけと言われると仕事なのだから業務命令だと受けとめてやります。女性の場合でももちろんやりますが、それにプラスアルファで、私のことをよく見てくれて話を聞いてくれて、だから任せてくれるんだと思われるとより一層のパワーが出てく

るといっていいでしょうか。

竹下 そこに理由があることによつて、その先を自分でかみ砕いて、ああこういうことかとなるとすごく理解できますね。

いい群れになったときは男子以上のパワーが出るということですが、一歩間違えるとネガティブなエネルギーも生む。群れで共通の敵をつくりやすいとあります。たとえば、何よあのコーチやってらんないわよと言つて固まってしまうこともあるわけですね、可能性としては。

竹下 悪い群れになると、そういうこともあります。

### セッターは人を輝かせる

そのためにはコミュニケーション。お互いに話し、話され、そして真鍋監督のように聞いてあげることが謙虚になることも大事ということでしょうか。

さあ次は、「セッターは人を輝かせるポジション」である(図4)。自分に合わせてアタッカーにスパイクを決めさせてあげるのがセッターの役割。どんなに後輩のアタッカーでも竹下さんが合わせてあげるのですか、トスというのは。

竹下 はい。スパイクというのは助走があつて空中でスパイクを打つので、どれだけセッターとのコンビ

ネーションが上手くいくかでポイントが取れるというところ。助走に合わせてセッターはトスを上げないといけないので、そこはセッター任せといえますか、両方が合わせようとしてもなかなか合いません。

アタッカーはあくまでも自分のタイミングでジャンプして打点に入れと。それに私が合わせるから、ちゃんとあなたの助走から見るからということですね。

竹下 そうです。

自分の苦勞や工夫をわかってもらえなくとも、ひけらかす必要もなく、チームとして点が取ればそれでいい。それが一番の喜びだということ。心の余裕、貢献できたときの喜びややりがい。なかなかわかりにくい部分ですが、たとえば

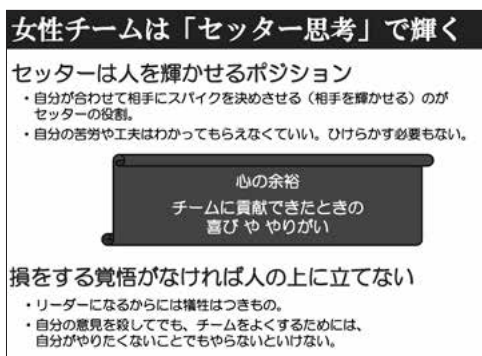


図4

J-T時代、全日本の時代、これが嬉しかったというワンプレー、いろいろなプレーを思い出されることあります。

竹下 本場にレシーバーが必死に上げたものを自分がトスを上げて、アタッカーが決めてくれたというこの繰り返しなのですが、それだけでも本当に嬉しいことです。勝利というのはゲームメイクがあつてというのが自分のなかにあるので、スポットライトがアタッカーにあつたとしても、やはりそれまでがなばつてきたものというのは変えられない事実なので、そこはもう自分自身で自分を褒めているような感じですよ。

——それは心の余裕というか、私はいいけどみんながんばってくればそれでいいという。メンタル的に非常に安定した状態でないとなかなかそこまで到達できないと思いませんが、いかがでしょうか。

竹下 やはり一度精神的に苦しい時期も経験したので、そういうことを考えると、みんなにいい思いをしてほしいとか、私のような嫌な思いをしてほしくないというふうに変わってきました。

——いったん競技を離れて、悩まれた時期というのが、J-Tそして後の全日本においても極めて大きな心のゆとりにつながってきたので

しょうね。そして、「損する覚悟がなければ人の上に立てない」。リーダーになるからには犠牲はつきもの。ときには自分の意見を殺しても、やりたくないことでもやらなといけない。厳しいですね、これは。

竹下 やはりできれば楽な方向に行きたいというのはあると思います。でも楽なほうに行ってしまうと、その先がないのではないかと思えますし、敢えて苦しい方向に行くことが成長するきっかけになるのかなとも感じています。

### どう頑張ればいいのか具体的に示す

——柳本さんも、それから眞鍋さんもセッターのご出身です。とにかく誰よりも働いてデータを分析して、そして選手に優勝の喜びを味わってほしい、勝利の栄冠を掴んでほしい、そういった活動がチームとしての結果につながっていた部分もあるわけですね。

そして、「どう頑張ればいいのかを具体的に示す」(図5)。データに基づく目標を設定して数値化ということになります。お話に出させていただいた眞鍋政義監督はiPadを駆使してデータでチームを引き上げました。数字で評価される

**女性チームは「セッター思考」で輝く**

どう頑張ればいいのかを具体的に示す

データに基づく目標を設定。数値化。  
時には、気合や根性も必要。

女性は数字で評価されることを嫌がる  
女性は人を受け入れるのに慎重

積極的に話しかけて警戒心を早めに解く  
人それぞれに合った接し方が必要。

男性は言葉足らず

図5

ことを女性は嫌がりますが、逆にお前こうだよというふうに出されると、納得せざるを得ない部分もありますね。

竹下 結構女性は、あの人好きだから、あの人嫌いだからコートに立たないといったことがありますが、数字にすると本当に明確にパツと出てきますね、いい悪いが。そうなると反論できない、選手として。あの子が好き嫌いじゃなくて、いい者は使う、悪い者は使わないとはっきりしたものが出てくるので、そこで言い訳が効かなくなってくるので、選手としてはすごく嫌ですけどすごくわかりやすい。

——何故あの子だけ監督は使うのか、でもそんなときにiPadなりチームの控え室のデータ一覧表な

りを見ると、そうか決定率がこうなんだと。それは残酷なことではあるけども、ある種基本的に納得ができるということでもあります。ただし、出し方というのが非常に問題で、会社の営業成績みたいにかく貼りだしてお尻を叩けばいいというものではない。眞鍋さんはiPadの差し出し方ひとつでも非常に細かくやってくさつたと

竹下 1年目はその数字をみんながタイムアウト中に集まっているのなかにバンと出していました。それは選手としてアタッカーもそうですし、みんな自分の数字が悪いと交替させられるのではないかと考えるようになっていました。それが2年目になると、もう直接その数字は私だけにしか見せなくなりませんでした。

——セッターの竹下さんだけに。竹下 はい。そうすることによって、アタッカーは数字を気にせずプレーに集中できるという。

——トスを上げるのはセッターの竹下さんなので、お前が頭に入れておいてくれと。で、どう使うかというのは竹下が考える。でもアタッカーの人たちはとにかく竹下さんの上げるトスに集中すればいい。自分のプレーに集中すればいい。数字で比較されて悩んだりドキドキす



ること、悪い面に関しては背負わなくてもいいという感じですね。

竹下 そうです。

—— プレーヤー、女子の選手などには積極的に話しかけて警戒心を早めに解く。よくあるのが、新しい監督が就任すると、これからは俺の言うことに従ってもらいたいな感じでドラマが始まったりすることがあります。男子の場合はそれ以上手くいく場合があるかも知れま

せんが、女子はできたらそういうやり方はしないほうがいいということでしょうか。

竹下 そういう監督もいらっしやいました。私もそういうような監督とやったこともありましたが、それはそれで上手くいくときもありあります。ただやはり崩壊するときもあります。チームとして上手くいくためには、最初の入り方が非常に大事ではないかと感じました。

—— 最初に見ていただいたアタッカー型の選手の方が監督になる場合もあります。俺について来いというタイプの監督さん、指導者、キャプテンの方もいて、ときにはそういう引っぱり方をする場合もありますが、そういう方でもほとんど話しかけたり、それぞれに合った接し方をするこゝによって、気持ちを伝えることができるということでしょうか。

竹下 いまと昔を比較することはあまり好きではありませんが、今の子どもたちはみんなの前で1人だけ怒られるというのに慣れていない子もいます。ではどうやって対応するかといえば、1対1でしっかり話し込むとか。そういうちょっとした工夫ですね。そうすることによって、若い子ともコミュニケーションが取れるし、ちよつと年が上の選手ともコミュニケーションが取れてい

くのですよ。

—— バレーボール教室などで、今の子どもたちには極力話を聴いてあげることが必要だなと思われることがありますか。

竹下 受け身というか、待っている子が結構多いので、だからこちらから積極的に話していくということも必要ですし、私自身プレーヤーとしての印象が強くて恐い人だと思われているので、子どもたちにも(笑)。なので、自分から少しでも話しかけて和ませすということは意識的にやります。

—— ときにはコート離れた食事とか何の他愛もない世間話のなかでコミュニケーションが取れる場合もある。外でちよつと話しかけることも含めてやってみたらいいのではないかと。

竹下 はい。私たちは有難いことに合宿所があったり、遠征先でみんなで食事をするこゝがあったので、食事会場でみんなと話したり他愛のない話からいろいろな人間性が見えたりということが非常に大きかったわけですね。

—— 特に選手同士、アタッカーの方の気質を見抜く上では、この子こんな食べ方をするんだとか、机、意外にきれいにしているみたいなことがプレーのヒントになったりすることもあるというふうには書いて

ありました。

竹下 食事もそうですし、一人ひとりが他人とどういふふうに関係しているのかなとか、どういふ会話をしているのかなというところでも、人間性が見えてくるこゝがあります。

—— どんどん先を読んでくれる子もいれば、待ってそれを受けとめるタイプの子もいます。で、問題は男性は言葉が足りないということ。声をかけまればいいということでもないとありますが、どういふ言葉が具体的には嬉しいもの、糧になるのでしょうか。

竹下 私は比較的そんなに話しかけてもらわなくても大丈夫な選手でした。ただ、やはり私を見てという選手もたくさんいます。そういう子たちにしつかり声をかけてあげることも必要ですけど。見て見ただけなら、やはりそこで一方通行になってしまうので、そこは上手く引いたり、押ししたりではないですけど、そういうことを繰り返しながらというの大事ではないかなと。

### できない理由を できる理由に変える

—— コートのなかでは厳しさもありますが、ときには柔らかく接して言葉をかけてあげること、見て



女性チームは「セッター思考」で輝く

「できない理由」を「できる理由」に変える

「背が低いから戦えない」  
⇒ 「背が低くても戦える」

- ・自分たちがもっていないものに目を向けるのではなく、もっているものに目を向け、それでどうやって戦っていくかを考える。
- ・優秀な人ばかり集めたからといって、必ずしも強いチームになるとは限らない。



図6

よというサインの出てる子には応えてあげることが必要があるというふうに思います。

さあそして、「できない理由」をできる理由に変える(図6)というポイントです。具体的に竹下さんの例でいうと身長が159cm、世界のプレーヤーのなかでも非常に小柄である。ただ、その身長の低さを逆に武器にして戦っていったという実績があります。最初にスタジオに来ていただいたときに印象深かったのは、低いボールがレシーバーから返ってきたときに、身長の大kinaセッターというのはアンダーで上げるしかない。でも竹下さんのように小柄な選手だったら、潜り込んでエビ反りをしてでもオーバーハンドでトスを上げることができる。これが小柄なセッターとしてのひとつの強

味になるかも知れないというお話をさせていただいたように記憶しています。アンダーとオーバーではトスの精度が違ってくるのでしょうか。

竹下 球質が変わってくるので、アンダーパスの場合はボールがくるくる回転しがちですが、オーバーパスはそのままだま回転せずにふんわりとしたボールが行きます。

—— できればみんなオーバーハンドで上げているので、ふだんのトスのボールで上げてあげたい。だから、もう床に着きそうなら姿勢でもできたらオーバーで上げるということを考えているのでしょうか。

竹下 そうですね。身長が低いので駄目だ駄目だと言われ続けているのですが、でもやはりできることはそれ以上にたくさんあるのではないかと、そういうふうに自分の考え方を考えていって、プレーもそうですし、オーバーパス、アンダーパスもそうですし。小さいからこそできるレシーブであったりとか、そういうことを追究することによって、自分は生きて行けるのではないかと変わっていききました。

—— セッターはトスを上げる役割はもちろんです。ボールを拾うレシーバーとしても本場に竹下さんは超一流のプレーヤーであったと思います。スポーツライターの吉井妙

子さんが書かれた『世界最強最小セッター 短所を武器とせよ』という本が出ていて、こちらもバレーボールが好きなお方には参考になるかと思えます。そして、持っているものに目を向けてどうやって戦っていくかを考えるということですが、これはご自身の身長の問題もそうですが、指導者の立場になられたときに、たとえば柳本監督がアテネオリンピックの前に、こういうことで選手を選んだというお話が載っていました。ある方からこの3人の選手は選ばないほうがいいのではないかと言われたことがあると。具体的には全日本キャプテンでいらつした吉原知子さん、そして高橋みゆきさんと竹下佳江さん。吉原さんについては年齢が高くなっているから、それがネックになるのではないかと。高橋さんについては170cm、アタッカーとしてはやはり小柄である。竹下さんも身長の問題があると言われていた。柳本監督はそれぞれにストロングポイントがあって替えられないと。吉原さんは経験やテクニク。高橋さんはチームを明るくする性格、そしてガッツがある。竹下さんはスキル、技術がある。これは他のプレーヤーよりも確実に優れている点。さらにはこの3人も挫折を経験している。前のオ

リンピックに出られなかったことも含めて、この経験が非常に大きい。だからこそ3人は外せないと考えたということが載っていました。

何を持っているか。持っていない、年齢が高い、背が低いではなくて、彼女たち一人ひとりが何を持っているかを指導者としてはフォーカスされたということ。

竹下 そういうところから自分自身も考え方がどのように変わって行ったということもあると思います。外の声ばかりに耳を傾けていた時期もありました。駄目だ駄目だ。そうではなくてやはり自分が必要としてくれるところがあって、自分を生かせるポイントがあるということから、少しずつ変わっていききました。

—— なかなかふだん指導されている皆さんは短所を直してあげるのもお仕事なので、そこに目をつぶって長所ばかり見るといことは日々の活動のなかでは実は難しい部分かも知れませんが、そこは絶えずブレずに持っていてあげることが大切なのですね。優秀な人ばかりを集めたからといって必ずしも強いチームになるとは限らない。ときには短所、ハンデを持った選手でもそれが大きなバネ、力になることがあり得るということでしょうか。

次「悩み続けることでしか答えは

出てこない」。これは考えること、悩むことは大切ということでしょうか。

竹下 そうですね。悩むというよりも考えるということですか。答えをもらっているとその答えをもらったことで、すごく楽だと思えます。

それをやればいいだけということ。そうなるとう自分の成長にもならないし、人としての成長もとまってしまおうと思えます。しっかりと考えて先に進むポイントというのを出していくということが重要なのではないかと思えます。

——「悩む」という日本語を使うとどうしても同じところをぐるぐるルーティンのように思考が回って前へ進めないということもあるかと思えますが、逆に悩んで考えることで、出口、一歩前へ進むポイントが見つかることがある。それは何かのきっかけで与えられることばかりではなくて、やはりそこは考える蓄積がないと、ポンと前へ出るきっかけもない。具体的にはたとえばキャプテンを柳本監督に任せられたときにも大きく悩まれたと思いますが、この解決方法は。

竹下 本場に記者会見のちよつと前にキャプテンをやってくれというように、もう「はい」としか言えないような状況をつくられていたのですが、でもチーム状況を見るとや

はり私しかないのかなと感じて、前のキャプテンの吉原さんみたいなキャプテンシーは發揮できないかも知れないけれど、私ならではの形でできたらと思つて、そのときは引き受けました。

——吉原さんはアタッカーで、自分で引つ張って行くタイプ。それはできないけれども、私は悩んで考えることでセッターのやり方でキャプテンシーみたいなものができるかも知れない。

竹下 そうですね。できないと壁を作っているのはひよつとしたら自分自身かも知れない。チームに必要であるなら、必要とされたいのならその壁を崩していくしかない。私はキャプテンの器ではないからといって逃げ回ってばかりいるとそこから上に行く、あるいは殻を突き破って大きくなることはできない。

竹下 いま木村沙織選手がキャプテンをやっていますが、彼女は小学生、中学生、高校生、どの年代でもキャプテンをやったことがない選手です。ただ彼女は彼女なりに考えて自分がやるしかないと思つたと思いますし、そのキャプテンをやることによって彼女自身も成長している、いま最中です。

## セッター型リーダーに

## 求められる条件

——一時期すごく悩まれたことがあつたそうだけれども、竹下さんが先輩のキャプテンとして、「沙織は沙織のやり方でいいよ」というふうに声をかけられてからすごく彼女自身楽になつたというふうに聞いています。

次は、「セッター型リーダーに求められる条件」。キャプテンのお話が出ました。吉原さんはアタッカー型、自分でプレーでも言葉でもグイグイ引つ張って行けるタイプ。でも竹下さんはセッター型のリーダーということであつておられたのが、たとえば柳本監督と選手たちとをつなぐ接着剤になれたらということですね。

竹下 柳本監督というのにはちよつと言葉が足りなかつたりとか、強い部分があつたりするので誤解されがちなところがありました。そういう意味では選手が胸に思つていることと監督が思つていることが一致しないということもあつたので、しっかりと自分がつながないといけないなどは感じていました。

——そのキャプテンあるいはリーダーになつたときに必要なポイントの1つが、ときには素直な自分を見せる(図7)。コートのみならず、声かけをするのではなく、離れ

たときにちよつと素に「戻つて話しかける」と感じでしょうか。

竹下 自分という人間はこういう人間なんだよというの、たまに見せることが必要なのではないかと思えます。やはり上に立つて行けば行くほど自分がしっかりと背伸びをしてしまつたりということが、私にはありました。だからこそ、少しでも自分の素顔を見せることで安心感を相手にも与えられるという思いはありました。

——次のポイント、「リスクを承知した上で任せる」、任せ切ることが大事。具体的には本で拝見したのが、2010年のワールドカップで3位を取られた眞鍋監督。アメリカとフルセットにもつれ込んで、最後の5セット目が始まる前に、そ

セッター型リーダーに求められる条件

- ほどよい距離感でみんなをつなぐ「いい接着剤」に
- ときには素顔の自分をみせる  
(オンとオフを切り替えて普段は見せない一面をみせる)  
※素顔の見せ方には注意が必要
- 相手の心の状態を把握する

信頼関係



図7

れまでiPadでデータを竹下さんに見せていて、竹下さんが覗き込もうとしたら閉じてしまわれた。その後何と言われたんですか。

竹下 いつもはフルセットまで行った後に、このセットはこういう形で行こうと数字を見ながら話しますが、そのときばかりはもう数字はいいからということ、竹下、このゲームはお前に任せるよということをおっしゃっていただきました。

——まさに先程出た任せられて嬉しい、セッター冥利に尽きるという瞬間ですね、そこは。

竹下 そうですね。最初、真鍋監督との出合いの時は「あー、この監督は何を考えてるんだろう」というところからスタートしているのですが、だんだんそういう信頼関係ができていき、試合もそのように任せてもらえるようになるというのはいすごく嬉しかったですね。

——男性の場合もそうでですけど女性の場合は特に信頼してるよというメッセージが伝わると大きな力が出せるのではないかなと思います。そして、ときに手を差し伸べるタイミングを考える。本人が考えて考えて自分なりの結論を出してしまう前にこちらから言うのはどうかということでしょうか。

竹下 やはり考えてポイントポイントで脱出できるところがあると

思いますが、どうしてもどっぷり浸かってしまつて、そこから這い上がつてこれないという状況になるときもあります。そういうときに最後の最後まで落ちて行つてしまつたら困るので、その途中で引き上げてあげるといふのも必要です。

——本人が深く悩まない前に先に言つてしまつてあまり響かないし、落ち込み過ぎてるところで手を差し出しても手遅れになる場合もある。アテネオリンピック最終予選前の合宿のときに、大友愛さん、一旦離れられて戻つてきた。でもなかなか、私戻つてきた立場だからという気兼ねもあつたのか早期練習に出てこれない。そんなときに、「いいよ。ちゃんとキャプテンに言つて、おいでよ」つておっしゃつた。

竹下 当時吉原さんとよくコンビを合わせていたのですが、そのなかに大友愛も入りたいてつてことを吉原さんには言つたみたいでした。吉原さんはマンツーマンで合わせたいから違う時間にしてという返事をされたみたいです。彼女もチームメイトで一緒にやりたいという意思を示している以上私はそこで彼女を中に入れないという思いがあつたので、私からも吉原さんにそういう話をして一緒にやるということになるわけです。

**セッター型リーダーに求められる条件**

- ・仲間の気持ちを一つにすることに集中  
ときには原因の分析や責任の追及を後回しにする
- ・真っ先にあきらめることだけは、してはいけない
- ・イージーミスにいち早く気づいて  
瞬時にフォロー

イージーミス  
軽視されがち ⇨ 致命傷になることも

観察&フォロー

仲間の気持ちをひとつに

——これは竹下さんががんばりましたね。吉原さんは先輩ですものね、前のキャプテンだし。でもときにはそうして自分も一緒に味方になつてあげて上の方に言つてあげることも大事ということですね。

—— 続いて、「仲間の気持ちを一つにすることに集中する」(図8)。

竹下 よく数字、データ重視といわれませんが、やはり最終的にはメンタルの部分というのは結構大きいところがあります。

—— トスを上げていて、すごくいいトスでさえあ打つて思つても、フェイントすることがある。フェイントかよと思つても、それは言わずにさあ切り替え切り替え、がんばつ

図8

ていこう、ということもある。

竹下 ありますね。

——リーダーに必要なのはもちろん、真っ先に諦めることだけはしてはいけない。テレビの中継で見ていると、あーこのセットはちょっと追いつかないわ、捨てセットだわというふうにしてしまつてもあります。でもコートの中のプレーは絶対に諦めないわけですね。

竹下 諦めません。最後の最後まででしつかり戦い切ります。

——特にセッターがそういう態度を見せたり、トスにそれが表れていたら絶対駄目ですね。イージーミスにいち早く気づいて瞬時にフォロー。ミスから切り替えることも大切ですが、フォロワーも必要。アタックラインを踏み越える、チャンスボールが返せない、お見合いをしてしまふ、というイージーミスが起こつたときはそれまで調子が良くても危険なサインだと。

竹下 そうですね。わかりやすいミスでポイントを多く決められたとか、スパイクミスをしたとか、そういうことよりも、しつかりセッターにボールが返つているのかとか、チャンスボールという柔らかいボールがしつかり返つているのかとか、ノーマークのボールが決められているのかとか、そういう当たり前のことが当たり前にできていないと

いうときが一番恐いです。

—— 相手がものすごくいいプレーをした場合はこれはもうしょうがない、切替えるしかないけれども、イーजीミスが出たときは、ここは注意しなければいけない。そこは突き詰めていく。

竹下 そこは突き詰めないと、後々自分たちのマイナスのポイントになつてきますから。

—— そして、そんなセッター思考を鍛えるためにはどうすればいいかというテーマです。自分は黒子であるという自覚。自分が「する」から「させる」に切り替える。これ、ビジネスの現場でもあろうかと思えます。自分がエース営業マンだったら自分がやったほうが早いです。お得意さんも自分の顔を覚えてるし。でもそうじゃない。敢えて若手にやらせる、トスを上げてあげるといことがチーム全体としては必要ということですね。

竹下 そうですね。自分が自分がとなると非常に楽ですよ、若手には。ただそれだけでは、チームというのはバランスが悪くなってしまうので。そういうバランスを見ながらやるということです。

—— チーム全体や若手を輝かせることができるか。タイミングやその人に合う最善が何なのか、常に考える。トスでも簡単なトスばかり

練習で上げていたらアタッカーは上達しない。かといって、難しいボールを上げていると打てないし、自信も失う。そのさじ加減でしょうか、バレーボールでいうと。

竹下 本当に反復練習でいいときばかりではない、悪いときの練習もしているのですよ。だから試合があつたら、いいときも悪いときもということでもちゃんとなくなつていきます。

—— 仕事を後輩、若手に任せることは大事ですが、リーダーというのは任せる仕事の難易度、それから硬い、柔らかいも含めて気を配つてあげる。ちょうど手を伸ばしたら打てる、もうちょっとがんばつたら打てるよということにボールを置いてあげるといことがビジネスの現場でも必要かも知れません。さあそして、「一人ひとりの個性や

得手不得手を見極める」(図9)。日頃からの観察ということがありま

した。食事のとき、あるいは会話をしていてこの子はどどういう子なんだろうと特徴を見分けることによつて、その人の成長、あるいはコミュニケーションに大いに役立つということ。女性は違いや変化に気づいてくれると嬉しい。眞鍋さんとか柳本さん、髪型変わったら言つてくれるとかありましたか。

竹下 それはいつも監督がおっしゃいますが、選手たちはそうではないよねと言っています。そういう髪型トクじゃないよねみたいな感じにどんどん変わっていくんです。

—— なんか気を遣つて俺は見てるぞふうだけど、ちょっと違うんじゃないの実は、と。

竹下 そうですね。でもそれだけでも、私のことを見てくれてるんだなと思う選手もいますし、もういいやそんな気遣いと思う選手も長くなれば変わってくるので。そこは監督としてはすごく厄介なところではあると思います(笑)。

—— そして、第一印象ということを選手、対人関係ですが、そこで決めつけてしまうとそれ以上相手を理解できない、常に自分のなかでアップデートしてあげることにも必要と。

対等に話すのが基本。相手を尊

敬しながら立場や経験が下でも話す。たくさんお話に出ました歴代の指導者の方、常に選手のほうに降りていってときにフラットに話してくれる。これが女性の方は特に嬉しいんですね。

竹下 本当に監督だから偉い、選手から行くのは偉いとかそういうことはないと思います。一人の人間として1対1でちゃんと話せる形を作つてくれるという点ではすごく私たちは恵まれてたなとは思いません。

—— ただ問題なのは女性は依存しがちとあります。あまりフォロース過ぎて、頼りにされ過ぎるとマイナスもあると。

竹下 自分で決め切れなくなります。どんないろいろなことを言われると、それがいいんだと思うと、

### 「セッター思考」の鍛え方

#### ・一人ひとりの個性や得手不得手を見極める

日ごろからの観察

普段では気づきにくい変化や癖、特徴などを地道に拾い上げていく

特徴をプラスの面として捉える

第一印象や直感で感じたことだけで終わりにしない

⇒ 決めつけたら、それ以上相手を理解できない

女性は違いや変化に気づいてくれると嬉しい

図9

### 「セッター思考」の鍛え方

#### ・ではなくWeを主語に考える

I 好き嫌いや個人的な思いを持ち込んだ時点で目的がぶれてしまう

We 個人的な感情に流されず冷静でいることができ、目的がぶれない

#### ・注意するときはWeを主語にし、相手を思いやる

相手を思いやる気持ちを中心に、何をいうべきかを考える

図10

「セッター思考」を磨く七つの習慣

習慣1

迷ったら「楽な道」よりも「厳しい道」を選ぶ

厳しい道を選べば選ぶほど、自分の成長を強く実感でき、チームへの貢献につながる

習慣2

「できない理由」ではなく「できる方法」を考える

考えることから逃げていたら、正しい答えには決してたどり着けない  
きちんと最後まで考えて、何が原因だったのかを突き止める

PDCAサイクル

図 11

「セッター思考」を磨く七つの習慣

習慣3

「仲間を信じる」と決めた自分を信じる

自分を信じて出した決断であれば、失敗しても後悔しない  
本当の意味で人を信じるためにも、自分を信じる

習慣4

「試合前」というよりも「日々」を大事にする

試合のとき以外は、つねに「準備」  
目ごろからの意識と入念な準備が、最高の結果を生み出す

図 12

「セッター思考」を磨く七つの習慣

習慣5

いまからでも一番になれるものを見つける

自分の人生において何か一番になれるものをつくっておく  
自分たちが実現できる強みを見つけて磨く

大きな自信

習慣6

「成功」も「失敗」も引きずらずに気持ちを切り替える

前も後ろも断ち切って、目の前の本番に集中する

図 13

「セッター思考」を磨く七つの習慣

習慣7

結果に踊らされず「目の前のこと」に真摯に向き合う

どういう過程でそこまで来ているのが大事  
つねに目の前のことに対して真摯に向き合う  
目の前のことに後悔が生まれにくい真剣に取り組む

図 14

それだけになりがちです。だからこそ、ちゃんと考えられる時間、考えさせる時間が必要だと思います。—— ときに一定の距離とか、メリハリ、はじめみたいなものを持って接してあげることも必要ということですね。そして、いろいろお話に出てきました、人が変わるのを待つ。本人が自覚をもって自ら間違いに気づくときと変わる。アドバイスするだけでなく、ときに待ってあげることが大切と。

竹下 そうですね。時間がないときは待ちきれないというときもあるとは思いますが、待つてその子が気づくということも絶対に必要なことだと思います。

—— 子どもたちを指導する上でも、やり方を教えるのは簡単ですが、「何でそうなったと思う？」と

いったように声をかけてあげることもあるわけですか。

竹下 問いかけることによって、がんばることができるときつかけにもなると思うので、そのようにちょっとずつ言葉をかけていくってというのは非常に大事だなと自分自身も思います。

「I」ではなく「We」を主語に考える

—— そして、「I」ではなく「We」を主語に考える(図10)。これまさにセッター的思考だと思いますが、私が打って決めるのではなく、限りある選択肢のなかで私たちが一番得点を取れるチャンスは何だろうということを考えるわけですね、セッターは。

竹下 はい。ときにはIじゃないといけない、「私が私」ということも必要だと思いますが、やっぱり私が考えるセッター思考では、チームとしてということが一番ベストなので、そこで何が一番重要なのかということ優先順位を下げながらしっかり考えていくということです。

—— 注意をするときはWeを主語にして相手を思いやる。具体的には、私たちが勝つためにはどうすればいいと思うか?というような問いかけでしょうか。

竹下 チームは1人だけが勝ちたいわけではなくて、やはりみんなが勝ちたいので、ではそのためには自分がどういう仕事をして、どのような役割でコートに立たないといけないのかという問いかけです。

—— 言葉で相手の心を揺さぶる。

相手を前向きにする言葉がけ、やるしかない、自分しかないと感じるような使い方。

竹下 言葉の力というのは非常に大きいと思いますし、いま現在私は解説などで話す仕事をさせていただく機会が増えていますけど、どうやれば人に入っていくことができるのかとか、言葉の持つ力というのは無限大だなと思います。

—— 話を聴いてあげること、そしてその人の心に響くような言葉をどうかけてあげるか、タイミング。非常に言葉はスポーツの世界でも大事なことだと思います。そして、「セッター思考を磨く7つの習慣」です(図11、14)。

竹下 私が社会人1年目のときに出会った監督が葛和伸元(のぶちか)監督という方でしたが、その方



ことだけに目が行きがちだとは思いますが、それまでの過程をどのように歩んできたかということが自分自身の自信にもなっていくと思いますし、その後の人生にも絶対役立つことがたくさんあると私は思っています。

——そして、「セッター思考」はみんなを輝かせてチームを組織を日本を元気にする可能性を秘めているということなんです。こういったことを考えられて特に最近お母さんにもなられて、あるいは指導する立場になられて、どんなことをいま感じていますか。

竹下 やはりバレーを通していろいろな方と出会っていろいろなお話を聞く機会をいただいて、すごく自分自身、人に恵まれているんだなということをすごく感じています。

——人との出会い。まさにスポーツというものは一人だけでやるものではなくて、人生もそうであるということになります。

では質疑応答に入ります。

質問者1 竹下さんのご主人はプロ野球選手ということですが、さきほどの3つのタイプのうち、どのタイプになりますか。もう一つの質問は、私は野球をずっとやってきました。ご主人も野球ということ、野球やラグビーとか他のスポーツが

——葛和さんはプレーではなくても、宴会部長でもいいから一番になることが大切だとおっしゃった。

竹下 そうですね、最初のほうでもお話ししましたが、結果という

らバレーに生かせる指導、そういうものがありませんでしたら教えてください。

——ありがとうございます。江草さんはピッチャーですけど、バレーで言うアタッカー。

竹下 そうですね、アタッカー型のタイプだと私は思います。

——アタッカーとセッターのご夫婦はうまく行くのですか、ときにぶつかったりしますか。

竹下 うちの家庭は比較的仲が良い(笑)です。

——ありがとうございます。他のスポーツからインスパイアされること、経験を通していかがでしょうか。

竹下 やはり競技は違いますが、スポーツを見ることもすごく好きですし、先日もラグビーを観戦させていただきましたけど、やはりどういうトレーニングをしてきたのかとか、ただ勝ち負けだけでなく

て、どういっつながりプレーしているのかなとか。そういうことを見たりもしますね。

質問者2 スポーツ少年団の指導者をしています。自分はアタッカー型のアタッカーが一番コントロールするのが難しいと感じています。具体的にアタッカー型アタッカーに向けた言葉などありましたら教えてください。

竹下 はい。本当に難しいんですよ。アタッカー型のアタッカーというのは自分というものがしっかりありすぎて、他人の声が届いていかないというのがなかにはあります。では、そういうときにどういう言葉をかけたなら、この人の心に届くのかなということ、もうしつこく話して行って、自分のなかでその人に届く言葉をチョイスしていくわけです。一回だけで言葉は届くわけがないと思います。だからこそコミュニケーションを取って話しながら、人それぞれ響く言葉が違うので、この言葉は入っているな、これは入っていないなとか考えながら、ここぞというときに一つ言葉を取っておくという工夫をしたらいいかなと思います。

——ありがとうございます。



## パネルディスカッション

# 2020年東京オリンピック。 パラリンピック競技大会を機に 今後のスポーツによる青少年の 健全育成について考える

座長：  
**宮嶋泰子**

(テレビ朝日スポーツ局)



パネリスト：  
**佐藤充宏**

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)



**佐々木玲子**

(慶應義塾大学 体育研究所)



**荒木香織**

(兵庫県立大学環境人間学部)





入澤 座長は、宮嶋泰子さんです。宮嶋さんは1977年、全国朝日放送株式会社にアナウンサーとして入社されました。日本で最初の女性スポーツアナウンサーとなり、その後ディレクターを兼任。1980年モスクワから2014年ソチまで通算17回のオリンピックを取材されました。「ニュースステーション」「報道ステーション」のスポーツ特集担当ディレクター兼リ

ポーターとして220本以上制作されています。社外でも文部科学省中教審青少年・スポーツ分科会委員、文部科学省政策評価有識者会議委員、文部科学省コーチングコンソーシアム委員、日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会委員など多岐にわたり活躍されています。現在はテレビ朝日スポーツ局でスポーツコメンテーターとして活動していらっしゃいます。

パネリストは3名の先生方にお願いしています。はじめに徳島大学教授の佐藤充宏先生です。続きまして慶應義塾大学教授の佐々木玲子先生です。そして兵庫県立大学准教授の荒木香織先生です。ここからは宮嶋座長の進行のもと、

とり進めていただきたいと思います。それでは宮嶋さん、よろしくお願いたします。宮嶋 本日のお題は『2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に今後のスポーツによる青少年の健全育成について考える』です。皆さまご承知のように、スポーツ少年団も1964年東京オリンピックのレガシーのひとつです。どんなものにも当てはまると

思います。50年以上が経つと制度疲労が生じたり、変えていかなくてはならない部分が出てくるものです。スポーツ少年団もまた、創設当初の目的がそのままであり続けるのは、あり得ないことなのでしょう。時代に即している変え

ていかなければいけない。それは当然だと思えます。今日はそういった視点で、これからの少年団に何が必要なのかということも含め、皆さんにお考えいただければと思います。まず最初に佐藤充宏先生から、スポーツ少年団とはいったい何ぞやというところから始まり、これからどんなものが求められていくのかといった基本的な話をさせていただきます。佐藤先生は、日本スポーツ少年団指導育成部会、日本スポーツ少年団リーダー養成ワークショップなどのメンバーで、そのあたりを非常に熟知しておられます。では佐藤先生、よろしくお願いたします。

## 発表1 佐藤 充宏 氏 スポーツ少年団における活動・指導を通して

私は、日本スポーツ少年団指導育成部会にてリーダー担当を務めており、本日はその立場からお話します。

まず、日本スポーツ少年団の成り立ちですが、1962年6月に日本体育協会設立50周年を記念して創設されました。その創設の2年ほど前に日体協でオリンピック

青少年運動が開始されました。要するに子どもたちにオリンピックを知ってもらおうという運動がスタートしたわけです。それを契機として、62年に「青少年の心身の健全な育成」という理念を掲げ、日本スポーツ少年団が立ち上がりました。最初はわずか22団、団員数753人でした。

当時は2年後に東京オリンピックを控え、新幹線が走ったり、首都高速ができたりと、にわかにはオリンピック景気に突入している時代。日体協でも翌1963年に全国スポーツ少年大会を開催し、スポーツの啓発を促しています。そして東京オリンピック終了後、何と数年間のうちに団数1万団、団



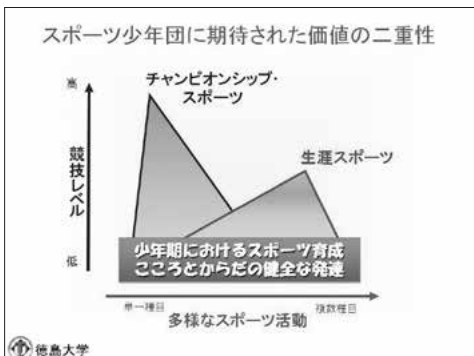


図1

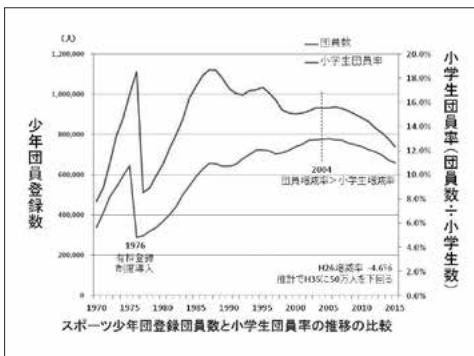


図2

員数26万人と、活動は大きく膨れ上がっていききました。さらに1970年代に入ると団員と指導者を含めて100万人を超える、非常に大きな団体に成長していききました。

このように東京オリンピックを契機に地域のスポーツ振興が図られたわけですが、その当時は、チャンピオンシップ・スポーツを頂点としたピラミッド型のスポーツ振興が広く行き渡った時代です(図1)。要するに、裾野を広げて高さを目指す考え方は、その底辺としてスポーツ少年団、少年にスポーツを広げることが非常に重要であるという考えがベースにありました。1970年代から80年代に入り、生涯にわたってスポーツを楽しめる社会にしていこうという「生涯ス

ポーツ」の考え方が浸透し始め、スポーツ少年団は子どもたちにとって地域の中でスポーツに親しむことができる場としても期待されるようになりました。要するにスポーツの「高度化」と「多様性」を軸に置いて、少年スポーツは拡張し続けてきたといえます。その基盤となるところに「スポーツを通じた心とからだの健全な発達」という理念を掲げ、スポーツ少年団は活動してきました。

### 変化を迫られるスポーツ少年団

しかし、現在少年団員は減っています(図2)。表は横軸が年代、縦軸が少年団員登録数です。上の線グラフが団員数で、下は小学生

数を分母にして団員の割合をパーセンテージで示しています。小学生団員率に関しては、小学4年生以上になると4〜5割と参加率が上がってくるのですが、低学年等にはあまり少年団に入っていない地域もあるため、このような低い比率となっています。

こうして見ると設立以来ずっと右肩上がりでしたが、2004年から2006年ぐらいにかけてが拡大のピークで、その後は団員数が減ってきています。しかも、少子化の影響で小学生がどんどん減ってきているのですが、その減少率よりも団員数の減っている率のほうが多くなってきました。子どもたちがスポーツ少年団を選ばなくなってきたという状況が少しずつ出てきています。

この背景にはさまざまな原因が考えられます。一部の少年団の競技的な側面を嫌うというか、保護者にいろいろな形でお手伝いしていただくことを推奨しているわけですが、それを嫌がる保護者が増えています。また、少年団以外に少年の親交ができる団体やクラブが地域にでき、少年団が選ばれなくなってきたことも考えられます。そういう面では少年団は地域の人たちから批判的に評価されているということですが、活動の質が関わ

れるようになってきたと言えるでしょう。

続いて少年団の発展過程の問題です。2006年頃から、国が進める総合型地域スポーツクラブが各地域で地域スポーツ振興の核となり始めました。当初、スポーツ少年団の中には、団活動を核にしたながらクラブ化を目指した団体も幾つかありました。しかしその大半は、総合型地域スポーツクラブへの対抗的な組織として少年団が位置付けてしまいました。その理由として以下のような問題が指摘されています。単一種目中心の活動であること、多くが小規模であること、学校単位中心であること、競技力の基礎教育的な活動になっていること、育成母集団の活動があること、自己完結的な発展をしてきたということ等です。これは、内に固まって子どもたちの教育をしっかり支援しようという大人の目を集める意味では非常に固い組織づくりではあるのですが、逆に地域にとつてみれば、それが外に向けてどんどん壁を高くしていつてしまうことへとつながりました。

多様な活動への抵抗感や、自主運営力の限界、スポーツコミュニティの広がりを抑制したり、指導の過熱と子どもを囲い込んでしまったり、一部の保護者が非常に過熱



しすぎて地域の他組織との連携ができない団体になってしまったという、スポーツ少年団の負の部分を解消しつつ、今後どういふふうに発展していけばいいのか。我々に突き付けられた課題は非常に大きいと思います。

もう一方で、ご存知のように少子化の大きな波がやってきました。

今後、ふたつの方向での選択が迫られています。

ひとつは、競技中心の活動を継続させるための選択です。子どもが減っている中で大会に出るために、低学年からチームに入ることのできる団体が増えてきました。野球のチームでも小学校の6年から1年までで、ようやく9人集まるといふ少年団が結構あります。それでも人数が集まらず、隣同士の少年団で集まって合同チームを作るという、広域的なスポーツクラブのような形で発展している団体もあります。私が調査に入ったある山間部の小学校では、3つか4つぐらいの小学校でひとつの野球少年団を作っていました。夕方になると学校の校庭にみんな集まって来るのですが、實際上、送り迎えができる家庭でなければ野球ができないという環境になりつつあります。

もうひとつは、地域の子どものための身体活動の場への選択。つまり、「もう競技の大会はいいじゃないか。それより日常的に子どもたちの生活圏でスポーツができるような活動環境にしよう」ということです。放課後、小学校低学年から高学年が集まってバレーボールを使って少し遊びながら、その中で少しずつバレーボールを教えようとい

**スポーツ少年団の理念**

- 一人でも多くの青少年にスポーツの喜びを提供する
- スポーツを通して青少年のこころとからだを育てる
- スポーツで人々をつなぎ、地域づくりに貢献する**

H26.6「スポーツ少年団の将来像」策定

図 3

うような指導者が始めています。いずれにせよ、スポーツ少年団は地域の子どもたちの生活をしっかりと見据えて、これからどういふふうに少年団の活動を展開していくべきか、それに携わる我々大人が考えて答えを出していかなければいけない状況になりつつあります。

### 「スポーツ少年団の理念」の再確認

日本スポーツ少年団では、日本子どもたちのニーズに合った活動環境を整備するために、平成19年にスポーツ少年団の将来性を検討するプロジェクトを立ち上げ、2年間にわたって意見交換や議論をおこないました。さらに都道府県ス



図 4

スポーツ少年団や関係団体の意見も踏まえ、平成21年に「スポーツ少年団の将来像」を取りまとめられています。

そこでは、まず少年団の在り方、すなわち理念を再確認しました(図3)。第一に、「一人でも多くの青少年にスポーツの喜びを提供する」、第二に「スポーツを通して青少年のこころとからだを育てる」、そして最後にこれは第三の理念と言われていますが、「スポーツで人々をつなぎ、地域づくりに貢献する」です。この新しく付け加えられた第三の理念が、これからのスポーツ少年団が向かうべき方向ではないかと、私は考えています。

スポーツ少年団の組織は、それぞれ単位団と呼ばれる小さなグループが団登録をするところから

始まります。それらを統括するのが市区町村スポーツ少年団であり、さらに都道府県スポーツ少年団、日本スポーツ少年団という階級があります。メンバーシップ制を取っており、各団から代表者を出してさまざまな問題を検討するような組織づくりになっています(図4)。

ピラミッドというよりは、メンバーシップ制であるがゆえに、日本スポーツ少年団の理念や政策的なもの、末端へと下りていくうちにだんだんと薄まっていくという問題があります。たとえば、スポーツ少年団が開催している全国大会に出場するための団であって、少年団の理念とは関係ない、という団も実際には団登録をしているのが現状です。全国的な事業を提供しつつ、少年団の理念や計画を浸透させ、地域の団活動をより良くしていくことを考えるのが、私たちの役目なのだと考えています。

### 事業推進の3本柱

この理念を具現化するため、日本スポーツ少年団では計画を立ててさまざまな事業を展開しています。今年度は第9次5カ年計画の3年目ですが、「組織の整備強化」指導者・リーダーの養成および指導

体制の拡充「活動の充実」の3本柱となっております(図5)。

特に今後のスポーツ少年団の方向性を考えていくうえで、3つの事業について少し紹介させていただき、今後の少年団の在り方について考えてみます。1つ目が「指導者の資格取得」、2つ目が「リーダー活動」、3つ目が「活動プログラム」です。

まず、1つ目の「指導者の資格取得」です。従来、1名の資格取得指導者がいれば団登録できたところを、平成27年度からは2名以上に登録規程を改訂しました。指導者を複数にすることにより、子どもたちのニーズに答えたり、あるいは指導者同士の切磋琢磨、相互に学び合える体制づくりを促します。その結果、社会的に信頼が置ける

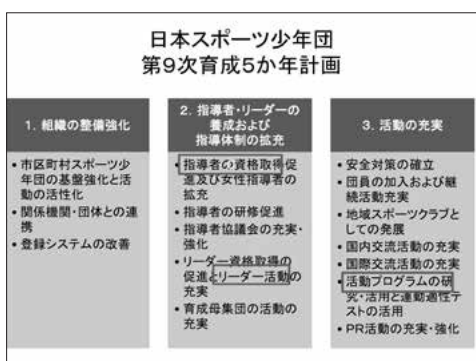


図5

スポーツ団体になっていけるのではないかと、という狙いもあります。

2つ目は「リーダー育成による次期中核指導者の養成」です(図6)。スポーツ少年団には小学生から20歳まで団員登録できますが、実際上、中学生と高校生の団員数は非常に少なくなっています。しかし中学生や高校生、大学生を含め、子どもたちの中核的な団員を育てる「ジュニア・リーダー、シニア・リーダー」制度があります。ジュニア・リーダーは各都道府県が管轄し、シニア・リーダーは中央の管轄で年に一度4泊5日の実習をおこなっています。これによって、少年団の理念を学び、種目を超えているいろいろな年代の少年たちと交流し、あるいはスポーツ指導のスキルを学ぶ機会を子ども



図6

もたちに提供しています。

しかしスクールへの参加人数は徐々に減っています。中学、高校は部活動に入ってしまうため少年団から離れてしまう、いわゆる「卒団」する子が多く、リーダーとして少年団に残る子どもは本当に一握りです。

シニア・リーダー・スクールで何をするかといえば、メインのプログラムとして「スポーツ実践」という形で子どものスポーツ遊びを作ってもらいます。高校1年生、2年生が中心となって自分たちの団員たちにとってどんなプログラムが作れるかを検討し、発育発達や指導方法を勉強したうえで、地元の小中学生を呼んで具体的なプログラムを提供していく実践型のスクールです。リーダーたちは最初はおどおどしているのですが、最終日にこういったプログラムをおこなうことで自信を持って帰ります。

### アクティブ・チャイルド・プログラム

3つ目は「活動プログラム」です。日体協では、少年期の遊びを奨励する「アクティブ・チャイルド・プログラム」(ACP)を作っており、少年団としても児童期からACPを取り入れようと、いま力を入れ

ているところです。

このACPは、先にご説明した2つの事業と非常に深く関連しています。たとえば、ジュニア・リーダー・スクールあるいはシニア・リーダー・スクールのプログラムにACPを導入し、リーダーが子どもたちの遊びを引っ張っていけるようにしています。また有資格指導者の複数登録制に関しては、指導者研修会の中でACPを提供し、学んでいた

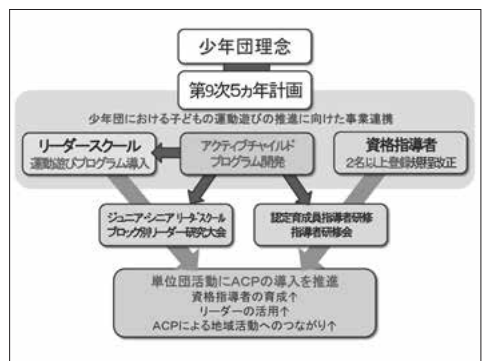


図7

いまのスポーツ少年団は、競技が中心になりがちですが、運動遊びの導入がどのように影響するか、図でシミュレーションしてみました(図8)。子どもたちの中には練習を通じて技能による序列ができてきます。それは学びの活動と言えるでしょう。私たちは、この競技

活動の中に「運動あそびのようなプログラムを導入しましょう」と推奨しています。競技だけの活動では、非常に強いストレスが子どもたちにかかります。もう一方の遊びという空間の中で、子どもたちが主体的に活動できる場面を取り入れることで、心とからだのバランスがとれた発達につながると考えています。

親のほうにも、実際いろいろな問題があります。家庭の事情で、支援できる親とできない親がいます。あるいは、強くしてほしいという親と、スポーツを楽しませたくない親と、それぞれいいという価値観の違いも親にはあります。こういった親御さんたちの育成のネットワークをいかに子どもたち中心の支援活動にしていくか。過剰にや

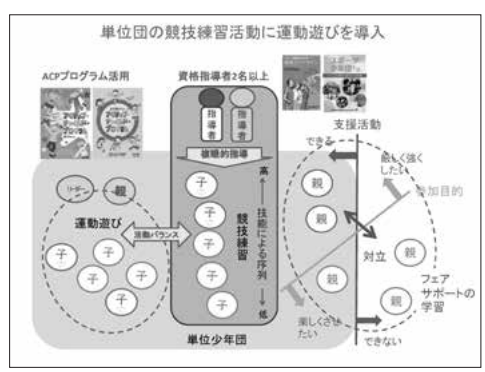


図8

り過ぎたり、ほったらかしにしないためには、ここに学習する機会が必要で、ACPを通じて子どもたちの健康や発育発達、遊びの重要性といった知識を学ぶことで、それを支援する体制づくりのきっかけとなるのではないかと考えています。

ACPを団活動に取り入れても、一方、それが導入できない単位団に対しては、「幼少期の子どもたちを対象としたACP教室のようなものを作ってみてはどうでしょう」という提案も、これからこういうと考えています(図9)。単位の体験入部のような発想によって、地域の子どもたちのために遊びの場として開放できるのではないかと思います。

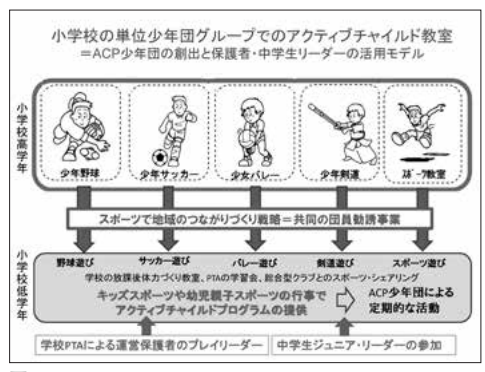


図9

これまで、我々大人は技能獲得や役割遂行、成果重視という実用

的な社会的評価をもって子どもがスポーツを見てしまうという反省があります。今回、スポーツあるいは運動あそびを改めて見直すことで、子ども自身の欲求充足、ストレス発散といった部分を忘れないようにしつつ、スポーツ活動ができる体制になればいいと思っています。「競技」はどちらかというと獲得する学びの活動ですが、「遊び」はその逆で、捨てる、発散する活動です。身体を型に嵌め、押し込めていく動きと、自由な動きをバランスよく取り入れていくという点においても、ACPを推奨する意義があると考えます(図10)。

2015年、今年のスポーツ少年団の団員数は71万人にまで減少しています。東京オリンピック開催の2020年には団員数が56万人

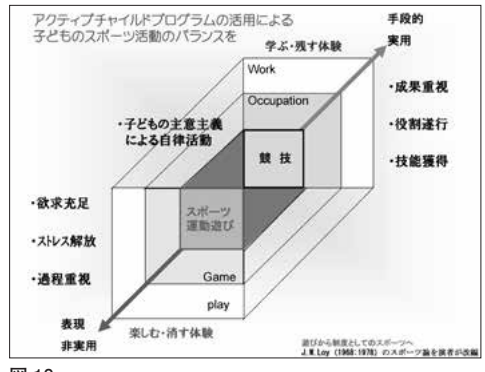


図10

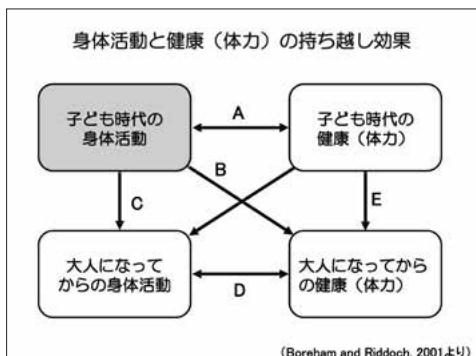


図 11



に減少する試算も出ています。本来のスポーツ少年団はどういう意義であったのか。そして時代とともに変わっていかなくてはいけない中で、今回「運動あそびの推進」というひとつの大きな方向性を示しながら、スポーツを通じて人々をつなぐ、地域づくりに貢献できる地域団体として大きく変わっていきたいと考えています。

宮嶋 スポーツ少年団の3つの理

発表2 佐々木 玲子氏

## 幼少年期における運動・スポーツの指導をとおして

子どもたちがだんだん減っている現実があり、それと同時に子どもたちの体力、運動能力、健康状態などが、心まで含めて低下していると言われていきます。佐藤先生発表の資料で、団員数が1985年のピークから落ちていく図がありましたが、学齢期以上の子どもの体力、運動能力もやはりその頃から低下しています。

これはある大学の研究ですが、子ども時代の身体活動、あるいは健康状態、行動習慣と大人になってからの関係性を見ているものがあります(図11)。なかなか正確に

念をあらためて聞くと、やはり少し変わってきているな、と感じるところです。

いまの第9次五カ年計画に基づき、子どもの運動あそびの推進に向けてACPの開発がおこなわれ、リーダースクールで運動あそびプログラムが導入されたことで、中高生のプレイリーダーたちが生まれてきている。そして2名以上の登録指導者が必要になったことで、複数の大人が子どもを見守るように

なった。それによって少年団の構図が随分変わってくるのではないかと、という佐藤先生のお話でした。

さて、現在のスポーツ少年団では、圧倒的に小学生の登録、特に4年生からの登録が多いそうです。「小学校に入ってからスポーツ少年団じゃあもう遅いでしょう」という声がこの数年ずっと上がっていますが、この辺りについて、慶應義塾大学の佐々木玲子先生にお話をうかがいましょう。

は捉えられません。おそらく子ども時代の行動には「持ち越し効果」、つまり元気に活発に運動していた習慣がある子どもは、大人になってもおそらくそんな習慣が身についているだろうと言われていきます。すなわち、子ども時代にどういう活動をしているかが、とても重要ということになります。

実際、幼児が活発にからだを動かす遊びの減少は、調査で分かっています。絵本やテレビを見る時間のほうが長くなっており、10年間で倍になっています。自転車や三輪車に乗る子は、20年間で25%

も減っています。からだの操作が未熟な、ぎこちない動きが小さい子どもの間に増えています。

自発的な運動の機会も減っていきます。自発的に、かつ多様な動きを経験することが幼少期にはとても大事ですが、特定のスポーツだけに取り組んでしまう状況が見られます。さらには、からだそのものを動かす機会が少なくなっています。ある調査では幼児の40%が外遊び1日60分未満であると報告されています。実際、きょうだいだけでなく、近所に遊んでくれるお兄さんお姉さんがなかなかいないため、

三輪車に乗る子は、20年間で25%

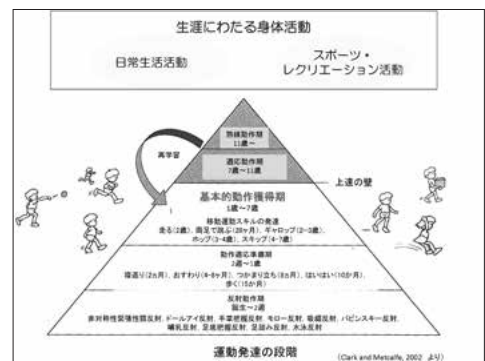


図 12

遊び相手がおらず、遊び場も少なくなっているのが現状です。

文部科学省の平成26年度調査によると、1週間の総運動時間が60分未満の子どもは、小学校5年生で男子6・3%、女子13・3%。中学2年で男子6・9%、女子21・8%という結果が出ています。一方、「運動やスポーツが好きですか?」との質問に対しては、60%以上が「運動・スポーツが好き」、さらに50%以上は「できるものならやりたい」と答えています。やはりこの子たちをそのままにせず、運動できる環境をつくってあげなければなりません。

「幼児期運動指針」

先ほど、少年団にも幼児を取り

込むという話がありました。およそ1歳から7歳の間は、自由な自分のからだを移動できるようになったあと、いろいろな次へとながる基本的な動作を身に付ける大事な時期にあたります(図12)。この畑がしっかり耕されていないと、学齢期になってクラス全員で何か運動しようという時に、つまづいてしまうことが指摘されています。青少年でのスポーツ活動や、さらには生涯にわたる身体活動につながるような土台をつくる大事な時期が幼少年期であることが、からの発達からも言えるわけです。

平成24年に文部科学省から「幼児期運動指針」が出されました。主体的にからだを動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児の生活全般の中に確保していくことが提案されています。ポイントの1つ目は

「多様な動きが経験できるようにさまざまな遊びを取り入れる」ことです。「遊び」という言葉が佐藤先生の発表にありましたが、これがひとつのキーになるかと思えます。幼少期は、筋力や持久力よりも神経系の発達が著しいので、いろいろな刺激を与えてあげることが重要です。2つ目のポイントは「楽しくからだと動かす時間を確保する」ことです。海外の研究や調査から、1日60分以上を目安に運動するよう提

案されています。そして3つ目のポイントは「発達の特性に応じた遊びを提供することです。3〜5歳あたりの幼児は、たった3年ですが発育の度合いが大きく違います。さらに同じ3歳でも、背の大きさや成育度合いが子どもによって異なるため、小さい子どもを扱う際にはより一層配慮しなければなりません。

こういった背景の下、スポーツ少年団では対象を拡大して幼児から小学校低学年も取り込んでいく流れになったわけです。いまの時代、小さい時から運動できる環境を与えてあげることが必要なのだ、という流れの中で理解することが必要です。

幼児期の発達特性

3歳〜6歳の幼児をからの発達と運動という面から見ると、最初はあまり大胆な行動はできず、おどおどした用心深い行動から始まります(図13)。4歳頃から自分に自信がついてきて活発になり、小学校へ上がる前あたりで自分のからだや動きがコントロールできるようになってきます。認知的機能も発達します。初めは自分だけの世界なので衝動的なからの表現になつてしましますが、徐々にやりた

いこと・できることが増え、自分ができたかを意識できるようになります。この時に、「できたね」と褒めてあげたり、できなくても何か違う部分でいいところを見つけてあげると、その先へつながると思います。もう一段階進むと、具体的



図 14

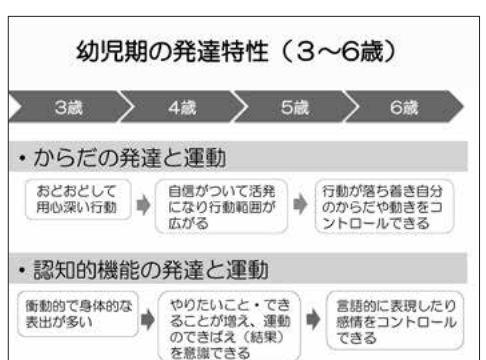


図 13

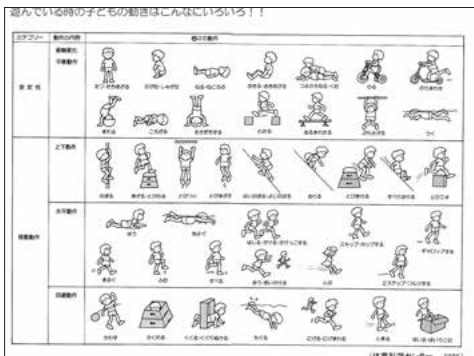


図 15

くやるためにどうしたらいい？」と子どもたちに聞き、「じゃあ自分たちで決めたルールを守ろうね」という流れを遊びの中で作っていくとい

客観的に表現できたり、自ら小さい子に教えてあげる事ができるようになります。

遊びの中で社会性も発達してきます(図14)。3歳頃では厳しいルールがある遊びをやらせても、まだ理解できません。遊びを通じてだんだんとルールや決まりが分かってきます。

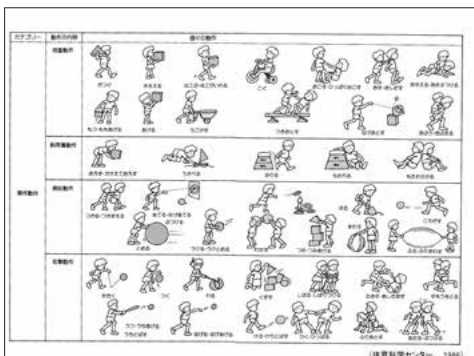


図 16

子どもの遊びを動作に分解すると84種類もあると言われていきます(図15、16)。大人は1日ほとんど動きませんが、子どもは本当にいろいろな動きをします。図は1980年代のものなので、現代では「やっちゃダメ」と言われて種類が

**動きの「質的評価」を**

いでしよう。

幼児は、遊びを通して多様な動きを身に付けます。それに加え、短時間で驚くほど上手く、動きが洗練化されてきます。上手くなるためには、繰り返し返すことが非常に大切です。ただただ数を増やすだけではなく、だんだんといい動きができるよう、大人が導いてあげることが必要になります。

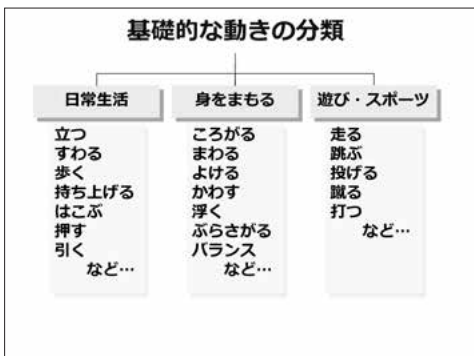


図 17

減っているかもしれません。その中でこのような分類もできません(図17)。1つ目は、日常生活に非常に関係する動き。2つ目は、身を守るなどにつながる動き。ちゃんと立ってられない子や、長く歩けない子でも、運動することによってしっかり歩け、ものを姿勢よく運べるようになります。また、遊びの中で自然に出てくる「避ける」「転がる」といった動きをからだで覚えることで、自分の身を守ることができるようになるのです。

遊びの中には、その後スポーツにつながるような動きもあるので、いろいろな経験をすることがとても大事です。さらにその動きというのは、小学生以上の場合「何秒で走った」とか「何メートル投げた」と

いうように数字で表せませんが、幼児ではそうした示し方は馴染みません。その子どもがどんな動きをするか、いわゆる量ではなくて質を観察し評価することが求められます。指導者としては、ただ教えるのではなく、その子どもがどんな動きをしているのか、動きとして完成していなくても今どこまでできているか、どこまでできていないかを見る目が必要なのです。

先ほどお話があったリーダー、あるいは親御さんたちでも構わないので、結果ではなく「質を見る」ことを理解してもらおうようにするといいでしよう。

**幼児期における「運動遊び」の意義**

今更ですが、「遊び」を定義すると「自由で自発的な、活動そのものを前提に楽しむ自己目的な行動。日常生活とはつきり区別された非現実的な本気でない虚構という意識を伴った行動」となります。「何かごとく」という世界で楽しむものが遊びなのです。

遊びで一番大事なのは、「自己決定と有能さの認知を追求する内発的に動機づけられた状態」です。やはり自分がやりたいことをやるのが大切。自分で決めたからこそ、

幼児期における運動あそびの意義

- 1. 体力・運動能力の向上  
調整力、危険回避能力
- 2. 健康なからだの育成  
生活習慣、丈夫な身体
- 3. 意欲的なこころの育成  
意欲、有能感
- 4. 社会適用力の発達  
感情のコントロール、友人関係
- 5. 認知的機能の発達  
脳の発達、空間認知能力

図 18

じゃあいま持っている自分の全力を頑張ってお出そうという行動につながっていきます。また自分で「できるぞ」という自己有能感を持てると、これをもっと高めようとする、上から言われなくとも自分でもっとやりたいというふうになるのです。

運動あそびの意義としては図の5つが挙げられます(図18)。このうち「体力・運動能力の向上」と「健康なからだの育成」の2つは、結果としてそうなるのであって、これが目的ではないだろうと思います。特に重要なのは「意欲的なこころの育成」「社会適用力の発達」「認知的機能の発達」の3つです。1つ目は、「意欲的なこころの育成」。もっとやりたいという意欲や、人から褒められて「自分ももっといけるかもしれない」という自己有能感、運動

だけではなく日常生活ひいては人生にまでつながっていくものだと思います。

2つ目は「社会適用力の発達」。友だちと何かをする。あるいは年上、年下の子と何かをするときに、自分がそのグループの中でどのように振舞ったらいいのかが、遊びの中で分かってきます。

3つ目は「認知的機能の発達」。運動すること自体で、脳にフィードバックがかかり、運動する能力だけではなく考える力や空間認知能力、リズム感やバランスといった脳機能の発達を総合的に促します。

指導にあたっての重点事項は、指導者の皆様方はもう理解しているかと思えます。発達段階の理解や個人差の考慮、異年齢を一緒にまとめる時の工夫など。指導者そのものから醸し出される雰囲気も、子どもにとっては非常に大事です。それから褒めることや辛抱強く見守る態度も必要だと思います。子どもたちで話し合いをさせて「自分で決めたんだから、そのルールは守ろうよ」といった運動だけではない子どもならではの指導の観点・コツというものもあると思います。佐藤先生のお話ともつながりますが、育成母集団といった支える人たちがどれだけ理解しているかも重要です。また、リーダーがただ単に

大人から教わった教え方を子どもに伝えるのではなく、重要な役割として与え、活用することも必要になると思います。

大人の場合、たとえばテニスができるようになりたいと思ったら、意図的にテニスの練習をします。まずは素振りをやって、次は何をやって、というように段階を踏んで、最終的にテニスができる。ところが子どもの場合、必要性よりも興味があるかどうか、です。そして、本当はこれを教えたかったんだけど、別のものができちゃったという場合もあります。それは駄目なことではなくて、大いに二重丸を付けてあげなければいけません。まずは「こうじゃないかな？」と体験しながら身につけるのが子どもの学び方です(図19)。大人とは学

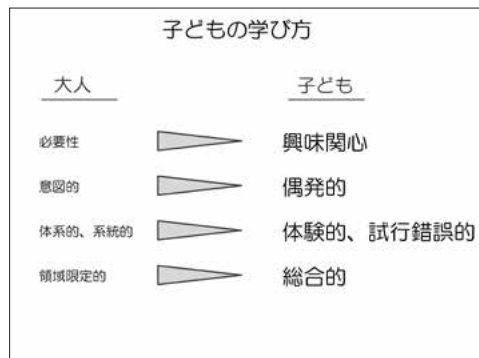


図 19

び方が異なることを理解したうえで、指導にあたるのが大事なのだと思います。ACPには、いまお話ししたようなことがギュッと詰まっています。その他には、お年を召した方がよく知っているような伝承あそびも載っています。興味があれば、ぜひお読みいただければと思います。

宮嶋 スポーツ少年団に幼児期の子どもたちが入ってきた時に求められるものが、漠然とではありませんがお分かりいただけただけではないかと思えます。最後に佐々木先生がおっしゃっていた「育成母集団やリーダーの活用」はこれから本当に必要になってくると思います。

また「指導者は質を観察する目が必要になってくる」という点は重要です。指導者は、いままでのように技術と心を育てるだけでなく、子どもの発達という点についても勉強しなければいけないのかもしれないです。

さて、続いてはたいへん旬の方、兵庫県立大学の荒木香織先生です。荒木さんは、ラグビー日本代表のメンタルコーチとして2012年から4年間かかわり、ヘッドコーチのエディーさんとする意味タッグを組んでチームを強くしていった女性です。では荒木先生、お願いします。





発表3 荒木香織氏

## 世界を舞台に活躍するアスリートの 〔医〕科学的なサポートをおおして

佐藤先生が発言された「スポーツ少年団の理念」の中に、スポーツの喜びを提供するとか、スポーツを通して青少年の心とからだを育てる、そしてスポーツで人々をつなぎ

地域づくりに貢献する、というお話がありました。実はラグビー日本代表にもこれと同じような理念があてはまるところがあります。また佐々木先生は幼児の自己決定や意欲、有能感というお話をされましたが、実は日本代表、20代30代の大きな男性にもそのままつながるところがあると思います。

まずメンタルコーチという仕事について、私の中では皆知っていると思っていました。今回のことではほとんど知られていないことに気が付きました(笑)。そこで少し情報を提供したいと思います(図20)。

選手へのアプローチとしては、チームのカルチャー構築、もしくは選手間の理解を深める手助けをします。選手個人に対しては、練習に前向きに意欲を継続して取り組むことができるよう手助けをし、また試合のための心理的なコンディショニング、たとえば緊張したらどうしよう、パニックになったらどうしよう、といったサポートをしてい

きます。

またコーチへの情報提供として、選手の特徴を理解したり、どのように選手を強化していくか、メンタルの部分の情報提供もどんどんしていきます。コーチ自身に対しても、どういうフィロソフィーを持って選手たちの指導にあたるのかというところも手助けをするこ

### メンタルコーチとは？

#### 選手

- チーム  
チームの伝統・カルチャー構築  
選手間の理解を深める
- 個人  
練習に前向きに意欲的に取り組む  
試合のためのコンディショニング

#### コーチ

- 選手・チーム  
選手の特徴を理解する  
選手強化の方法論
- コーチ自身  
フィロソフィーの確立  
ストレスの軽減

図20

### 何をする？

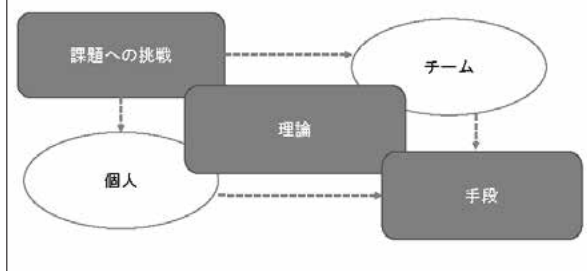


図21

とがありますし、コーチのストレスの軽減、たとえば練習が上手くできないとかチームづくりが上手くない、試合に勝てない、楽しませることができないといった悩みにも介入していきます。

実際に何をするか(図21)。私たちはつい「悩み」と言ってしまう、「できない」「問題がある」などが、私たちの仕事では、なるべく明るくなる前向きな言い方になります。「悩んでるんですけど」と言われたら、「よく考えていることにしましょう」、「問題がある」のではなく「課題に挑戦していきましょう」と言いかえています。私たちは、

## グローバル化

- ・世界を知る
  - ・選手の国外での経験
  - ・コーチング環境の充実
- ・リーダーシップ
  - ・主体性・自主性
  - ・コミュニケーション力
  - ・コーチアビリティ  
(コーチングの受け方)

図 22

## トップスポーツに関する研究 (荒木・小谷, 2013)

- ◆参加者：トップスポーツに携わる女性9名  
 □アスリート3名・レフリー1名(20-30代)  
 □コーチ3名(30-40代)  
 □理事2名(50代)
- ◆平均年齢：41.78歳(26-58歳, SD=11.32)
- ◆獲得メダル数：120個(金:66個, 銀:23個, 銅:31個)
- ◆「世界を知る」ことの重要性・海外での経験やネットワークが競技力向上への力手
- ◆報酬の充実

笹川スポーツ研究助成

図 23

課題への挑戦として、スポーツ心理学の理論に則って個人とチームにアドバイスしていきます。

私がいま一番感じていることは、グローバル化です。東京オリンピックの開催が決まったこともあり、子どもたちが「世界を知る」と強く「リーダーシップ」スキルを身に付けていくことが、今後の日本スポーツの発展と充実につながるのではないかと思います。今日はこの2つについて情報提供します(図22)。

## 「世界を知る」ことの意味

まず「世界を知る」ことについて

お話しします。少しラグビーから離れますが、笹川スポーツ研究助成から助成金をいただき研究をした結果です(図23)。これは女性アスリートとコーチ、理事に関する研究ですが、「世界を知る」あるいは海外でのネットワークや経験が必要という点については男女の区別はないので、参考になると思います。少しいろいろなことを例として挙げていきます。「世界を知る」とはどういうことか。自らの拠点を日本から海外へ移したある選手は、「日本が一番便利だけれども世界で戦うことを考えた時にはどんな環境でもやっていけるとかいろいろ情報が入ってくる必要がある」と考

えています。皆さんが指導されている子どもたちの中にもこういう志を持った子が現れてくるはずですので、サポートしてあげていただきたいと思います。

またあるコーチの声ですが、「世界に行ったら自分たちのペースで競技が進んだり、思うようにいくとばかりではないから、その中で自分の力を発揮できるように、海外で練習や合宿をおこなった」と言っています。

また競技団体の理事の声としては「いろいろな海外の選手たちとの交流の場をどんどん日本のスポーツの現場に提供していきたい」と言っています。

やはり、世界で戦う経験をした選手がコーチになった時、選手時代の経験が活かせることがあります。

これは少し今日の話題から外れますが、この研究の中では、報酬の充実についても提言しています。メダリストのコーチであっても、大学や高校の子が世界で一番になっても何の報酬もありませんし、反対にご飯を食べさせないといけないから自分のお財布からお金が出ていくぐらいだという声があります。またある著名なコーチの例ですが、遠征費が協会から出ないので、会社に「すみませんお金ください」と言っ

たら「何でコーチがお金払って遠征に行くんだ」と言われたそうです(笑)。日本のスポーツとしてももう少し報酬の充実に取り組んでいただけたらと思います。

## リーダーシップは育てられる

次にリーダーシップについて、先ほど少年団の中でもリーダーシップについて取り組んでいるという話が出てきました。実は日本代表も、本当にそれに添ったことをやっていますので、それも含めてお話しします。

心理学的に、リーダーに必ず必要といわれている感情知性というものがあります(図24)。インテリジェンスと聞くと「賢い」と思いますが、感情のインテリジェンス(エモーショナル・インテリジェンス)のことです。その中の1つ目は「自己理解力」、すなわち自分を理解してくださいということ。私たちは、なかなか自分のことを理解しているようではなかったりします。アスリートもどういう状況で試合に臨めば一番いいパフォーマンスができるかということを考えながらやっているの、自己理解が必要だと言われています。

2つ目は「自己制御力」。自分の感情をコントロールする力がリー

リーダーに不可欠な感情知性(Goleman, 1998)

要素	定義	例
自分理解力	自分自身のムード、感情、原動力そしてそれらの他者への影響力に気づき理解をする能力	自信、現実的な自己評価、ユーモアのセンス
自己制御力	不愉快なムードや感情をコントロールする能力 行動する前に考える能力	信頼、誠実、忍耐、不愉快なことへの寛容さ、変化に対するオープンな姿勢
モチベーション	動くことへの情熱： 金銭や地位を超えることを理由とする	達成への強い気持ち、失敗のなかでの継続主義、組織へのコミットメント
共感力	他人の感情についての理解能力 個々の感情の反応にあわせて個人に接する能力	才能の褒めと維持、個人を取り巻く環境への理解
社会的スキル	対人関係やネットワークの構築をする能力 共通点を見つけてラポートを形成	変化をリードする能力、チームの構築とリード

図 24

ダーシップに必要なと言われている。少し腹が立つことがあるが、チームメイトやチームのために自分の感情をコントロールしていくという事です。

3つ目は「モチベーション」。お金や地位は必要ですが、それを超える前向きなモチベーション、たとえば楽しみや充実感、満足感をモチベーションとしてやっていく気持ちが必要だと言われています。

4つ目は「共感力」。周りの人に共感する、他人の感情について理解することができるスキルが必要と言われています。

最後の5つ目は「社会的スキル」。対人関係やネットワークを構築す

る力や、説得力をもって誰かに話ができるような力が必要だと言われています。

これらのことは「スキル」ですから、生まれつき持っているものではありません。習得してもらうことはできますし、現場で必要だなど思いながら自分で練習しながら身に付けていくことのできるスキルです。子どもたちにもこれらのスキルが身に付くよう、練習を通じて教えてあげられれば良いのではないかと思います。

### 変革型リーダーシップ

スポーツの場面で一番使われている理論はトランスフォーメーション・リーダーシップ、変革型リーダーシップです。これまでリーダーシップの要素として、「カリスマ性がある」とか、「背が高いほうがいい」「スポーツができたほうがいい」とい

ろいろなことが挙げられてきました。しかし研究の結果、リーダーシップというのは「フォロワー、つまりチームメイトや教えている子どもたち等すべての自分たちに付いてきてくれるはずの人たちが私利私欲を超える何か情熱を持って取り組むことができるよう、その人たちから楽しみや満足感・充実感を引き出してあげることができ

ることだ」と言われるようになってきます。ですから、背が低くても、スポーツができなくても、カリスマ性がなくても、リーダーになれるということなのです。

リーダーシップには、4つの要素があると言われています(図25)。1つ目は、「自分がこういうことをしたい」と影響力を与えられるように目標や基準をしつかり子どもたちに訴えているかどうか。子どもたち同士リーダーシップであれば、キャプテンが「こういうチームにしたい」と伝えられているかどうか、規律を持った行動ができるかどうか、がリーダーシップのひとつです。

2つ目は、内的なモチベーションを刺激できているか。単に「勝つぞ!」ではダメですし、「今年の目標は全国で一番だ」とか「地区で一番だ」といつてもリーダーシップにはなりません。それを超えた何か充実感のある目標を提供することが必要です。

3つ目は、思考力への刺激です。日頃当たり前としてやられていることについて、「たとえばあなただっただろうしますか」と質問を投げかけながら、その人たちが自己決定できるように、考えていることに対して刺激してあげることでもリーダーシップの要素だと言われています。

変革型リーダーシップの4つの要素

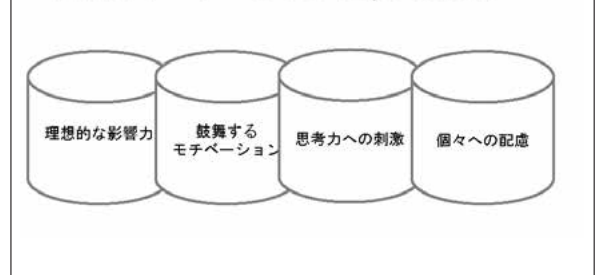


図 25

ます。

4つ目は、これは日本人の一番得意な分野だと思えますが、それぞれの子ども、それぞれのチームメイトに興味を持って配慮してあげられるかどうか、思いやりをもってコメントしてあげられるかどうか、ということもリーダーシップの要素のひとつだと言われています。

### 選手中心のリーダーシップグループ

日本代表のリーダーシップには2つの柱がありました。1つはエディー・ジョーンズというヘッドコーチが、外国人のコーチが殆どで日

本人のコーチがひとりだけだったのですが、そのコーチ陣5〜6人をまとめあげて引つ張っていく形です。そしてもう1つは、私が関与したところですが、選手が中心となって選手を率いていくリーダーシップです。キャプテンを中心として5〜8人のリーダーシップグループをつくり、2012年からいろいろなことに取り組んできました。

具体的な取り組みを少しご紹介いたします。エディーさんは、就任した2012年、「世界ランキング10位」を1つの目標として掲げていました。その当時、日本はランキング15位だったので、5つランキングを上げることは相当にきついことだと分かっていました。それでもコーチたちは、「勝つ、ランキングの10位になる」という目標を掲げて練習メニューを組んでいきます。そこで私たちメンタルコーチができる仕事は何かと考え、これは自己決定とか有能感につながりますが、最初の2年間は「勝ちの文化をつくる」ことを目標に取り組みしました。

どういふことかという、日本代表はそれまでの24年間、ワールドカップで1勝しかしたことがなく、参加しても勝てないチームでした。勝てないチームなので招集されてもやる気は出ません。選手は「どうせ負けるんだろうな」と思います

し、日本代表として招集されても、断る選手がいました。当然、誇りも持てませんし、支持もありません。何もないところから、ではどうするかと考え、「勝つチームはどんな行動をしているのか」「勝つチームはどれだけ自信があるのか」「勝つチームはどんな誇りを持っているのか」というところからリーダーたちと一緒に話し合いながら、チームを作り上げていきました。

その結果、2年目の後半から3年目にかけて、対国の試合、テストマッチで11連勝することができました。ところが、11連勝の途中、勝っているのですが何か面白くない。普通は勝ち始めるといろいろなこと

が、何か違う。それが何かと違ってミーティングをした時、選手たちから「誰かの憧れの存在になったりとか、歴史を変えたりとか、もっと何か大きいことをしたいね」という

話が出てきました。勝ちの文化をつくる中で実際に勝つ経験ができたので、では「もっと大きなことを目指そう」ということになりました。

この時点で、エディーJAPAN



標を設定することは得意ですが、完成することは下手くそなので、もともと達成できなさそうな目標は立てないほうがいいと思います。達成できないと思ったら変えたほうがいいです。達成できた次の目標に変えていけばいいので、そのほうが自信がついてくると思います。

「憧れの存在になる」というのは、たとえば他の競技をしている子どもたちに「ラグビーをやりたい」と思ってもらえたり、すでにラグビーをやっている子どもたちが「僕も代表に選ばれたい」と目指して、招集を断るような選手がゼロになるということです。「歴史を変える」こともミーティングの中で出てきました。本当にしんどい練習をしているのに、11連勝しても別にちやほやされるわけでもなくて（笑）、もうちょっと何か浮かべたい。「何か世間がびっくりするようなことを起こさない」という中で歴史を変えたいというフレーズが出てきました。

そのためには、やはりエディーさんのためのラグビーでは無理で、そこから抜け出す何かが必要となります。エディーさん就任4年目の今年4月、ワールドカップまであと半年という時に、「もうちょっと僕たち日本人が主体性を持って、選手が自主的に何かをやっているか」とモチベーションも続かないし面白く

は11連勝したことによって世界ランキング9位になっていました。そこで私たちは「来年のワールドカップでベスト8を目指そう」と目標を変えました。目標を変えることはとても大切です。私たちは、割と目

ない。必ず勝ちに行く、エディーさんはそういう練習をしてきてくれた。もう少し自分たちでドライブして取り組んでいこう」という話になりました。

### 勝ちの文化をつくる

「勝ちの文化をつくる」ことについて、もう少し具体的に説明します。

1〜2年目に取り組んだ主なことは、2つありました。1つめは国歌斉唱です。私たちの年代というのは、日の丸とか君が代と言われても、あまり堂々とできていませんでした。世界レベルになると、各国の選手たちが大きな声で国歌を歌い、涙を流しながら誇りをもって国の代表としてプレーしています。ところが日本代表では君が代を必ずしも歌わずにうつむいているという傾向がありました。そこから世界基準からは劣っているということで、まずはそれを変えていこうと、1、2年目は、テストマッチや国際試合ではスタッフを含む選手全員で国歌を斉唱しました。

2つ目、先ほど佐々木先生が「子どもたちを褒めてあげましょう」というお話をされましたが、実は私たちも「自分たちで褒めながら、自分たちでモチベーションと自信をつけてやっていこう」ということにな

りました。これは、日本代表として世界で戦えるというモチベーションや自信を自分たちで作るにはどうしたらいいか、と選手たち自身が考えたことです。ラグビーは少し乱暴なスポーツですから、それまではミスしたら

「お前何してんねん！」とか「もつと下がとけや！」というような言葉がすごく多かったのですが、ミスしても上手いかなくてもとりあえず前向きに「こうしていこう、ああしていこう」という言葉がけに変えていきました。また、一度できたことが何度でもできるようになれば、いいチームになっていくことが分かるので、良かったことに対しては「良かった」というようにしまし

た。日本人は少し謙虚ですから、他人ができてはあまり「できたね」と言わないのですが、それを変えていきました。

たとえば、選手Aは「個人を尊重する。それぞれのプレーを尊重し

て、失敗してもその人を卑下するようなことは絶対言わない」と言いました。また選手Bは「最後にはロッカーやバスでゴミ拾いをして、手伝ってくれた仲間に『有難う』と声かけする」と言いました。よく皆



さんから「日本代表はロッカーやバスでゴミ拾いをしたんですか？」と聞かれますが、そうです。私たちはそういうところから始めました。特にラグビーは規律のスポーツですから、規律が乱れると相手に点

数を与える機会、ペナルティーを与えてしまい、即失点につながっていくのです。選手Aはラグビーの練習中、選手Bは練習以外のオフの場面でのリーダーです。また、選手Cは若手のリーダーで、最初は「練習中、声を出して褒める」という抽象的な目標でしたが、4年目になると具体的にいい目標が変わっていきました。選手Dは外国人選手ですが、日本語は流暢です。「外国人同士で日本語で話したり、本当は外国人同士のほうが居心地がいいのですが練習以外で一緒に行動することはやめよう」と言っていました。

### バディ・システム

日本代表では、バディ・システムを取り入れていました。これは2人組で準備をしっかりとすることによって自信につながりましょう、という取り組みで、練習前と練習後を利用して、練習に対する確認作業をしました。何をするかということ、戦術・メンタル・フィジカルの中の最低2つの項目の good と target について2人組で考えます。今日良かったこと (good) は何か、そして次の日の練習でしたいこと (target) は何か。私たちは反省することは得意ですが、反省する時間は悪かつ

たところを考えることになるので、勝ちにはつながりません。ダメなことを反省するよりも、できたことを確認して明日何をしたらいいかについて確認したほうがメンタル的にはいいのです。

たとえば、戦術で良かったことは何か、スクラムの対応力が良かった、ラインアウトの獲得率が何%だったとか、キックオフのキャッチが良かった、と良かったことを挙げ、「明日はじゃあこういうことをやっていきたいね」とそれぞれに挙げていきます。そこで出されたコメントを、チーム共有のファイルにどんどん挙げていくと、40人ぐらいのチームですら20個ぐらい挙がってきます。それをキャプテンを中心にまとめて掲示板に貼っていく、といった細かい作業をしていました。

### レジリエンスの習得を

子どもたちに何ができるか、ということですが、皆さんが指導している子どもたちが、将来日本代表として活躍してくれるようになることは夢があると思います。ですから「リーダーシップ」のスキルもそうですし、「世界を知る」ことなどを考えながら、指導していただければと思います。スポーツ心理

学には「レジリエンス」という言葉があります。いままでスポーツ指導の現場では、努力とか根性とよく言われてきましたが、挑戦に対して上手く取り組む力とか、困難をどうやって乗り越えたいのかを、指導者のほうから教えてあげることによって、割とすんなり越えられることがあります。我慢して何百回もやらせるよりは、「こういうふうにすればいいよ」と教えてあげることによって、指導の時間を短縮できますし、選手の自信にもなると思いますし、パフォーマンスの向上にもつながると思います。こういったことも念頭におきながら、指導していただければと思います。

宮嶋 有難うございました。ラグビー日本代表が何故あそこまで戦えたか、その一端が分かったような気がしました。スポーツ少年団においてこれがどう反映できるのか、おそらく皆さんもそう思いながらお聞きになっていたかと思います。まず「リーダーシップ」は作ることができる、というお話でした。指導者のリーダーシップもそうです、持っていくきょうによつては少年団にいる子どもたちのリーダーシップも育てられるということですね。そしてもう一つ私が驚いたのは、目標というのはその時々によって明

確に変えていく必要がある、ということでした。ラグビー日本代表は、いかにワールドカップで勝てるチームになるかが目標だったわけですが、一方、スポーツ少年団の目標は、強くなること自体は大きな目標ではなく、いかに子どもたちをよりよく成長させていくか、ということにあると思います。それでも、子どもたちが変わってくることによって、そのたびごとにいろいろな目標設定ができるのではないかと、お話を聞きながら漠然と感じました。

### デイスカッション

宮嶋 佐々木先生は荒木先生のお話のどんなところに興味を持たれましたか。

佐々木 子どもも大人も一緒だな、と思いました。子どもの年齢が離れていると難しいと単純に思ってしまうがちですが、子どもたちであっても自分たちがどういうふうに関係の中、グループの中でやっているのか、ということを教えることは可能なんです。そしてそれを子どもだけの時点で、少なくともイメージだけでも持っておければ、大人に

なつてから教えなくても、そのままスツといけるのではないかと思います。

宮嶋 確かに、企業でリーダー研修のようなものが始まるのは、中間管理職ぐらいになつてからが多いですね。ことによれば、子どもの段階から異年齢の中でリーダーになる者の訓練を何度か繰り返していくと、そのまま知らず知らずのうちにいるいろいろなことが可能な人材が育っていくのではないかと思います。

佐藤先生、幼児期の子どもたちをスポーツ少年団が包含していくことに対して、おそらくここいらつしやる方々は、期待もさることながら不安も相当抱えていらつしやるのではないかと思います。私自身も、佐々木先生の話聞きながら、「幼児期の発達なんて私たちに分からないことがいっぱいあるし、動きの質まで観察することができるかどうか」といろいろなことを思ったのですが、そのあたりを佐藤先生はどのように考えますか？

佐藤 幼児期のプログラムを運営するのは、確かに非常に責任を伴うことだと思います。現段階では小学生以上が少年団員と規定されていますが、実際のところ、たとえば小学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんが少年団に入っていたら、その



きょうだいである幼児も少年団に  
来ている場合が多くあります。そ  
ういう子がお兄ちゃんが練習して  
いる間、端のほうで遊んでいる時  
に、「何か遊びの場を提供できない

だろうか」というご意見がありま  
す。少年団としては、いまの段階  
では、きちっとした指導ができる状  
態であり、安全確保ができた場で  
条件を整えば進めてみてくださ  
いという形で、幼児期のACPを推  
奨しています。

ですから「幼児期から少年団に入  
れなさい」というものではありません。  
ただ、先生方からも指摘があ  
ったように、この機会というのは、  
我々大人が気づけなかった部  
分であると考えています。遊びと  
聞くと、すぐに大人は「遊びか」と  
思いがちです。少年団の指導者で  
も「我々はレベルの高いことを教え  
ているんだ」とよく言われます。遊  
びは非常に低いものと見られ過ぎ  
ていたのではないかと。それを我々も  
もう一度考えていく必要があると  
思います。

宮嶋 子どもの動きは大人よりも  
多様だという佐々木先生のお話を  
聞くと、私たち大人はむしろ子ど  
もを見ながらいろいろと教えられ  
ることがあるのだらうと思います。

佐々木先生、いまの世の中は少  
子化になつているので、兄弟姉妹が  
3人も4人もいる家庭は少ないと  
思います。そうすると、少年団の  
中で疑似姉妹、疑似兄弟のよう  
なことが体験できるかも、という気  
がするのですが。

佐々木 そうですね。実際にス  
ポーツや遊びだけではなくて、そ  
の場からつながりができていくこと  
もあります。日常だけですと本当  
に一人ぼっちでどういうふうにと  
かわつていいのかわからない、特  
に小さい子は学校に行っていない  
ればそういう感じになると思いま  
す。少年団からいろいろなお兄さ  
んお姉さん、弟や妹という関係を  
経験することで学校にスムーズに  
入れるところにつながるかもしれ  
ません。

また、学校に上がってから  
学校での世界と学校以外の地域、  
似ているけれども違う仲間とか、  
そういう幾つかの拠点が子どもに  
あるということは、特にいまの世  
中ですと重要なポイントになると  
思います。

宮嶋 子どもの遊びを考える時、  
いろいろな運動や遊びができるこ  
とによって、子どもの身体能力が  
開発され発達していくことは、お  
そらく皆さんもいまままで感じに  
なつていたでしょうし、言われなく  
てもそうだろうと想像できるかと  
思います。ところが、実は先ほど

佐々木先生のお話を聞いて、意外  
とプラスチックの違うところ、全  
人的な部分に発達の可能性がある  
というふうに感じたのですが。

佐々木 子どもだからこそ、そう

なのだと思います。ただ動くとい  
うよりも、仲間と一緒に何かをす  
ることで必ず工夫をしたり、動か  
すだけでなく動かす以前のところ  
で何か問題になつて考えることが  
必然的に出てくるのだらうと思いま  
す。そこでどういうふうに行つてい  
くかが大事になります。あるいは  
自分で上手いかなんかがあった  
時に、人から「我慢しなさい」と言  
われる前に、自分から「ここは  
ちよつと我慢かな」と、自分で気づ  
くことができる場でもあるかと思  
います。からだだけではなく、こ  
ろのコントロールと言うか、心理が  
育つのだと思います。

大人はどうしても、からだを動  
かすこと、勉強すること、という  
ふうに分けてしまいがちです。た  
だ勉強するにあつて「どういふ  
うに計画してやつていこうかな」と  
自分で考えられるようになるのも、  
やはり遊びの中で「順番をどうし  
ようか」と考えたことを勉強する場  
面に反映させられる子は出てくる  
と思います。

宮嶋 いまのお話で思い出したの  
ですが、3年ほど前、柔道の女子  
ナショナルチームの暴力事件があつ  
た時に、なぜこんな事件が日本で  
起きてしまうのだらう、その原因  
は一体どこにあるかを探そうとフィ  
ンランドのスポーツについて取材に

行きました。スポーツの学会などがよくおこなわれるユヴァスキュラ大学の先生にそこで教えられたのは、からだを動かすこと、遊びが脳にすごく効いてくるという研究がいま盛んにおこなわれているということでした。

おそらく佐々木先生がおっしゃった「全人的な力」は、まさにそういうユヴァスキュラの先生がおっしゃったことと同じなんだろうな、という気がしました。それは子どもだからこそ全人的なところが発達するということもあるかと思えます。しかし、荒木先生、おそらくこの4年間のプロセスで、日本代表選手たちもスポーツを通してきつと大きく変わっているかと思えます。

荒木 そうですね。私が選手へ「腹が立った時はどんな時ですか？」と聞いた時、ある選手は「チームメイトがミスをした時に腹が立つ」という答えがきました(笑)。ではそれをどうすればいいか。自分だけではなく、皆のパフォーマンスが向上する、切磋琢磨するにはどうしたらいいかというところから落とし込んでいきます。他人がミスをした時、どういうふうに声がけしたらいいかは、スポーツと関係なく、小さな時にどれだけたくさんの子どもたちと遊び、どれだけ違う性格

の子がいて、楽しかったか上手くいったかというところと最終的につながってくると思います。これは先ほどお話しした「個々への配慮」ということです。リーダーシップとは、いろいろな子の気持ちに分かりながら、その子がミスをしないように、上手くなるようにチーム全体で取り組み、チームのパフォーマンスを上げていくことです。決して、高校で一番、大学で一番だった選手が日本代表に選ばれているわけではなく、ほとんどはそうではなかった選手なので。宮嶋 高校や大学で一番だった選手ばかりではないというのは、何か理由があるのですか。

荒木 代表に来てはいましたが、残っていないということです。80人前後の選手が代表に出入りする中で、最終的には31人しか選ばれません。残ることができたのは、本当に総合的な人格にも優れて、もちろんラグビーも優れているバランスのいい選手ということですね。

宮嶋 これはとても大きな問題を孕んでいますね。はじめ80人で招集された時には、おそらく学校や地域でナンバー1だった人もいたと思います。地域のレベルでは、そういう人が1人いるだけで勝ててしまう。そうになると、「あの子がいないと勝てないから、大切にしなきゃ

ね」と、妙な育て方をしてしまうこともあるのではないのでしょうか。

荒木 その通りだと思います。そういう選手は勝ちにしか興味がないので、勝てなくなった瞬間に続けられなくなります。日本代表は勝つたことのないチームですから。勝てなくてもエディーさんのもとで猛練習に耐えうるメンタル力を付けていくということは、やはり先ほど挙げたような目標を魅力的だと思えなければできないことです。エディーさんは「いま私たちができることをやるんだ」と言いました。できることというのは、単純にラグビーを愛する、スポーツを愛する、一緒に過ごすことを愛するということとですよ。

宮嶋 いま全身の毛が総立ちしました。長い間スポーツの取材をしてきて、実際に「この子がいないと勝てないんだからみんな我慢しなさい」という指導者を山のように見てきました。ものすごく上手いけど、無茶苦茶ワガママで、「人のことは何にも考えないけど僕がいないと勝てないんだよね」という子が社会人になつていくと、これはもう手に負えません。そういう例をたくさん見てきましたが、何となくこういう大つびらなところでは言えないでいたんです、実は。そういう人を抱えながらそれでも勝つてい

く、「俺はそういうやつを褒めまくっていくんだ」という指導者もいます。いままでの日本代表で金メダルを取った人たちでもそうです。

でも、いまの荒木さんの話を聞いて、私は「やったー!」と思いましたが、まさに我が意を得たり。いまの言葉は本当に素敵だと思います。何十回でも言ってもらいたいくらい(笑)。80人いながら、結局残った人がどういう人なのか。地域でナンバー1だった人ではなく、チームでスポーツを楽しむことを知っている人だけが残ったということでしょうか。

荒木 はい、そうです。

宮嶋 結局そういう人を育てるのがおそらく今日ここにいらつしやる方々のミッションではないでしょうか。自画自賛ですが、いい研修会ですね(笑)。佐藤先生、いまのお話を聞いていかがでしょうか。

佐藤 本当におっしゃるとおりだと思います。やはり形として、私たちは外からしか評価できていません。こういう現場の本当の声を聴くと本質といいますか、こういう人たちが本当にスポーツの中核で活躍されていることを、ぜひ子どもたちに伝えたいですね。

宮嶋 子どももの段階では、中学、高校ぐらいまではからだが大きければそこそ良い成績を出すこと



もできませんが、では日本代表としてどうか。あるいは日本代表を終えて社会に出たとき、社会人として「使えないよなあ」という人では困るわけです。そこで何が必要になるでしょうか。

もし少年団でそういう「オレ様のな子がいたとき、どうやってその子に分らせていったらいいでしょうか。

荒木 家庭の環境は、やはり否めません。少年団の活動はおそらく週に数回だと思うので、親御さんにいろいろな情報を提供していくのが一番いいのではないかと思います。「送り迎えの車のなかで活動に関する話をしないでください」とか、「試合に勝ったからといってご褒美をあげるのは止めてください」といったことを伝えます。モノやお金で釣るのはモチベーション的には最低のモチベーションなので、そういうふうな家庭で取り組んでいたこともひとつの方法かと思いません。

宮嶋 もう少し詳しく説明して欲しいのですが、「モノやお金で釣るのは子どもにとって最低のモチベーション」とは？

荒木 言葉が悪くてすみません（笑）。先ほどお話しした私利私欲を超えるモチベーションというのは、そういう意味です。その子の

過去といまを比べてのご褒美だったからOKなのですが、他の子と比べてのご褒美や、どこのチームに勝ったからご褒美をあげるとするのは止めたほうがいいと思います。親だけでなく指導者も、その子が他の子より優れているから褒めるのではなく、一番上手い子も前の時より上手くなっていなかったら伸び率としてゼロなので、褒めるところは無いと思います。下手くそな子でも去年より3倍上手くなっているのなら、その子のことを3倍褒めるべきだと思います。そうやって個々への配慮をしていくと、ワガママな子にかけ言葉というものは、本当に無茶苦茶上手くない限り、そういう機会はないかもしれません。そうすることによって周りは気づいていくと思います。

また、その子の能力を引き出してあげるとい意味では、「上手いから」とか「できるから」ではなく、その子がワガママにならないような何か違う役割を与えてあげるといいかもしれません。

宮嶋 たとえばどういう役割で

しょう？

荒木 そのチームが持っている伝統やカルチャーもあるでしょうし、その子の性質もあるでしょうから、何がいいかは私たちが現場に行っ



て話をしてみないと分かりません。一杯戦ってくれました。そこでのモチベーションとしては、少し広い視野で物事を考えたときに、将来にこの経験は必ず生かせると考えたのかもしれません。

優等生が優等生でなくなったときにどういうふうに通っていくか。何か変化のある中で、その子の能力を必ず見つけて認めてあげることが必要だと思います。できる子にワガママさを発揮させるのか、何か違うことをさせるのか。ワガママさを発揮させるのはコーチや周りの大人なのだと思います。特に年齢が低い子はそうです。

宮嶋 「送り迎えの車の中でスポーツ少年団のことを話さない」というのはどうですか？

荒木 子どもたちは指導者からフィードバックをもらって帰ってきているでしょうし、負けたらその理由を考え、勝ったら喜びを分かち合っ

ただ、日本代表の1年目2年目にキャプテンを務めた選手は、ワールドカップでは1試合も出ていません。彼もすごい優等生でやってきましたけれど、結局下から支える役割を果たして、そこで腐らず精



佐々木先生はいまのお話をどう聞かれましたか。

佐々木 どういう種目なのか、チームなのかにもよりますが、小さい子の集団の中で、ものすごくできる子が出てきます。年齢にもよりますが、そういう子に「すごくよくできるから他の子に教えてあげて」とか「どうやってたできるの」といった役割を与えると、ケースバイケースですが、教えてもらった子との触れ合いができます。そこで「ダメなんだよ」と言ってしまうと、「せっかく自分はできるのになんだ」と

思ってしまう。できるものを友だちに還元してあげようというような持つていき方がうまくできればいい形になると思います。

宮嶋 先ほどプレリーダーという話がありましたが、これから特に異年齢、年齢差が大きくなっていくほど、そういう役割が必要になってきます。

20年ほど前、鹿児島にある松原小学校に通い、錦江湾を横断する子どもたちのドキュメンタリーを制作しました。小学校4年生の全然泳げない子から始まりますが、2カ月半の特訓で錦江湾を渡ってしまいます。そのトレーニングの過程で、すでに横断を経験している5年生と6年生が、4年生に対して「ここで頑張れ」「足ついたらアカン！」と励まします。実際に横断するときには、途中で疲れちゃう子も出てきますが、先生が言ったわけでもないのに「ほら、私の肩につかまって休んでね」と、お互い子どもが子どもを助けてあげる場面がたくさん見られます。

そういう意味で、ぜひ皆さんも「異年齢が怖い」とか「幼児が入ってきたらどうしよう」ではなくて、これから子どもたちがどんどん発育発達し、素敵な大人になっていく、将来いいリーダーになっていく十分な可能性があるとお考えいただけるといいかと思えます。

最後にお一言ずつお願いします。

佐藤 私自身、非常にいい勉強をさせていただきました。「遊び」というものを、いまもう一度見直さなくてはいけない。私たちは、それを口を酸っぱくして訴え続けたいと思います。皆さんにACPを活用してもらい、財産が残っていくような活動になっていったらいいと思います。本日は有難うございました。

佐々木 「遊び」と非常に強調しましたが、スポーツのベースには遊びがあります。遊びの中でいろいろなことができるようになってくると、「自分を高めたい、技術を磨きたい」となって、スポーツに興味が移っていく子どもが出てくるはずですよ。そういう意味での「遊び」だとご理解いただきたいと思えます。

荒木 外国人コーチが活躍されている場面が多く、現場に行っても英語ができないと仕事ができません。日本人だから、外国人だからというわけではないですが、こんなにたくさんさんの指導者の方がいらっしやって、懸命に勉強されているので、日本を愛する日本人のコーチが日本人を指導できれば、もっと憧れの存在になるチームができると思うので、皆さんのお力をいただきながら、これからも取り組んでいきたいと思えます。よろしくお願

いします。

宮嶋 今回は幼児にターゲットを絞ったものから「遊び」という言葉が出てきましたが、バスケットボール、バレーボールといったスポーツの動詞は「プレー」ですよ。すべて遊びということが基本になっています。その意味を考えていただいて、本日のシンポジウムを終了したいと思えます。有難うございました。

入澤 宮嶋さん、パネリストの皆さん有難うございました。このフォーラムでは、毎年有意義なお話で終わるのですが、ずっと司会を続けておまして、今日が一番得をしたという気がしています。ラグビーは日本の憧れになったと思えますし、「遊び」も重要な要素であります。ぜひともスポーツ少年団の皆さまは、今日のお話を地域に広めていただければと思います。今日は本当に有難うございました。これでフォーラムを終わりにしたいと思います。



総合司会：入澤 充氏



## 閉会挨拶

公益財団法人スポーツ安全協会 常務理事

関 美知夫

本日は遠方からも大勢の方にお集まりいただきました。午前中の基調講演、午後のパネルディスカッションと長時間にわたり、誠にありがとうございます。

皆さま、本日一日を通していかがでしたか。今後の取り組みに役立つようなヒントや気づきのようなものが多かったのではないのでしょうか。私の感想を申し上げますと、竹下佳江さんの基調講演では、ただただ話に引き込まれるのひと言でした。やはり一流のアスリートとして経験も豊富で肉体的にも精神的にも強靱なパワーに裏づけられた実績が聴く者を惹きつける力があるからではないかと、つくづく感じました。できない理由を考えるのではなく、持っているものに目を向けてどう戦っていくかを考えるべきだというお話は、特に印象的でした。まさに本日のフォーラムは、開会のご挨拶でもありましたとおり、ビジネスやさまざまな現場で役立つことがいくつでもありそうですねがいたします。

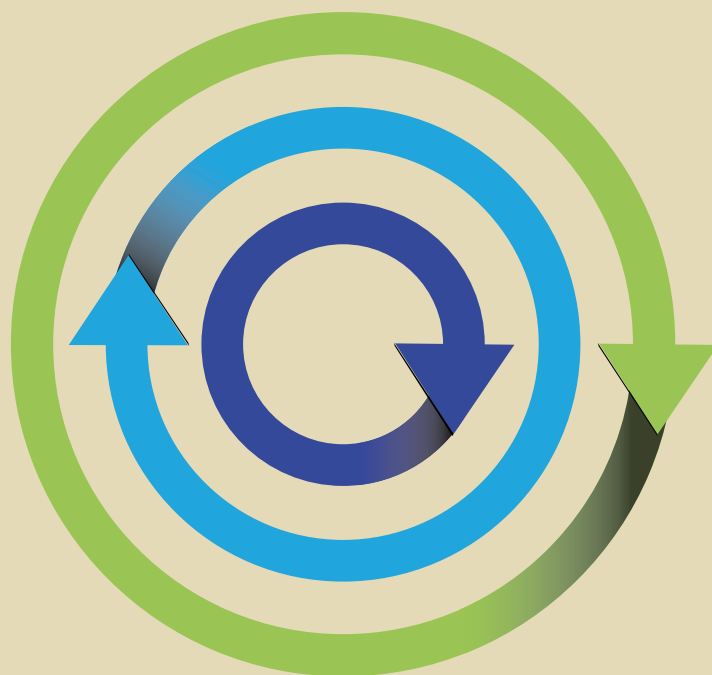
また午後のパネルディスカッションにおいても、宮嶋座長のもと三人のパネリストの先生方がさまざま問題を実に鋭くあぶり出してくださいました。また正面から切り込んでいく熱い姿勢、深いお考えといったものを私たちに深く染み込ませてくれたと

感じました。

さて、この会はジュニアスポーツの育成に欠かすことのできない安全・安心対策に關し、解決の方法をみんなで考え、探っていくことを目的としております。こうした観点に鑑みても、今年のこのフォーラムは大成功だったと嬉しく感じています。本日のこの会で得られた成果をぜひ活かしていただき、ジュニアスポーツの推進の中心的存在として、子どもたちの安全を確保し、より一層安心してスポーツを楽しんでもらえるような環境づくりに邁進していただくことを、大いに期待しております。

最後になりますが、主催者であります公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団、日本スポーツ法学会、公益財団法人スポーツ安全協会を代表しまして、ご講演いただきました竹下佳江さん、宮嶋座長と各パネリストの皆様、そして司会進行を務めていただいた入澤充先生、さらにはこの素晴らしい会場をご用意いただきました地元大阪の関係の皆さま方に、改めて厚く御礼申し上げます。閉会のご挨拶とさせていただきます。

皆さま一日お疲れさまでした。有難うございました。



主催 公益財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団  
公益財団法人スポーツ安全協会  
日本スポーツ法学会

協賛 スポーツ安全保険引受損害保険会社  
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社  
共栄火災海上保険株式会社  
損害保険ジャパン日本興亜株式会社  
大同火災海上保険株式会社  
東京海上日動火災保険株式会社  
日新火災海上保険株式会社  
富士火災海上保険株式会社  
三井住友海上火災保険株式会社